

扇が丘ヤグラダ遺跡

扇が丘・住吉土地区画整理事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書 II

2002年

石川県野々市町教育委員会

扇が丘ヤグラダ遺跡

扇が丘・住吉土地区画整理事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書 II

2002年

石川県野々市町教育委員会

例　　言

- 1 本書は石川県石川郡野々市町扇が丘に所在する扇が丘ヤグラダ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は野々市町扇が丘住吉土地地区整理事業に係るもので、野々市町都市計画課からの依頼を受け、野々市町教育委員会が発掘調査を行った。平成9年度（第1次）、平成10年度（第2次）にわたり発掘調査を実施した。第1次調査は平成9年9月20日～平成9年11月19日にかけて実施した。調査面積は3,000m²である。第2次調査は平成10年5月14日～平成10年9月10日にかけて実施した。調査面積は5,000m²である。発掘調査は徳野裕子（野々市町教育委員会）、永野勝章（野々市町教育委員会）が担当した。
- 3 発掘調査にあたっては野々市町都市計画課の協力を得た。
- 4 発掘調査の現地作業には次の方々の協力を得た。

井手和郎　木津美和子（故人）　水田芳子　中川吉三　小野幸子　細美保子　木下　光　西尾　稔
南外志雄　橋本美智子　徳田外喜栄　田端　実
- 5 出土品遺物整理は竹田倫子、野村祥子が行った。本書の執筆、編集は徳野が行い、遺物写真の撮影は永野が行った。
- 6 発掘調査及び本書の執筆にあたっては下記の方々から御教示を得た。記して感謝申し上げます。

岩瀬由美、岡本恭一、垣内光次郎、川畠　誠、滝川重徳、田村昌宏、布尾和史、藤澤良祐、横山貴広、吉田　淳
- 7 本書の挿図・写真図版の指示は次のとおりである。
 - (1) 遺構・地図などの方位は全て真北を表示する。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、(m)で表示する。
 - (3) 挿図の縮尺は図に示すとおりである。遺物は1/3を基本とした。
 - (4) 出土遺物実測中の番号は、遺物一覧表、写真図版中の遺物番号に対応する。
 - (5) 写真図版中における遺物の縮尺は統一していない。
 - (6) 遺構名の略号は、以下のとおりである。

竪穴建物（SI）、掘立柱建物跡（SB）、柱列（SA）、土坑（SK）、溝（SD）、ピット（P）、不明遺構（SX）
- 8 本報告書に記載した遺跡の出土遺物、調査記録は野々市町教育委員会が保管している。

P63～ 平成4年度発掘調査報告

- 1 本書は共同住宅建設に係る扇が丘ヤグラダ遺跡発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査、本書執筆は田村昌宏（現・鶴石川県埋蔵文化財センター派遣）が行った。
- 3 出土品遺物整理は市村美知栄、大杉幸江、長谷川啓子が行い、遺物写真の撮影は田村が行った。
- 4 発掘調査及び本書の執筆にあたっては柿田祐司氏より御教示を得た。記して感謝申し上げます。
- 5 本書の挿図・写真図版の指示は次のとおりである。
 - (1) 遺構・地図などの方位は全て真北を表示する。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、(m)で表示する。
 - (3) 挿図の縮尺は図に示すとおりである。遺物は1/3とした。
 - (4) 出土遺物実測中の番号は、遺物一覧表、写真図版中の遺物番号に対応する。
 - (5) 写真図版中における遺物の縮尺は統一していない。
 - (6) 遺構名の略号は、以下のとおりである。

掘立柱建物跡（SB）、土坑（SK）、溝（SD）、ピット（P）
- 6 本報告書に記載した遺跡の出土遺物、調査記録は野々市町教育委員会が保管している。

目 次

第1章 位置と環境	1
第2章 調査に至る経緯と経過	5
第1節 経緯	5
第2節 経過	5
第3章 遺構と遺物	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 縄文時代の遺物	7
第3節 古代の遺構と遺物	13
(1)堅穴建物跡	
第4節 中世の遺構と遺物	13
(1)掘立柱建物跡	
(2)柱列	
(3)土坑	
(4)溝	
(5)ピット	
(6)不明遺構	
第5節 近世以降の遺構と遺物	36
(1)溝	
遺物観察表	41
第4章 まとめ	46
写真図版	48
平成4年度 発掘調査報告	
第1章 経緯と経過	63
第2章 遺構と遺物	64
第3章 まとめ	66
土器観察表	71
写真図版	73
附図 扇が丘ヤグラダ遺跡調査区全体図	

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

扇が丘ヤグラダ遺跡は石川県のはば中央に位置する野々市町に所在する。野々市町は北と東は金沢市、西は松任市、南は鶴来町に隣接する東西4.5km、南北4.7km、面積13.56km²の平野部の町である。金沢市の近郊都市として市街化が膨らみ、現在は人口45,000人を超過する町となつた。近年、農業地帯の風景が失われていく一方で、土地区画整理事業等による都市開発が急速に進み、商業地、住宅地として現在も発展を続けている。

白山連峰を源流とする手取川は古くから暴れ川として知られ、現在の流路は鶴来町で北より西に向きをかえて日本海にそいでいるが、氾濫のたびに流れを南に移し、現在に至っている。

調査地の所在する野々市町東部は手取川扇状地の扇端部にあたり、東方には金沢市内を流れる犀川と手取川の河岸段丘に挟まれた富樫丘陵が南北に存在している。この丘陵間に縫うようにして小河川が平野に流下し、形成された微高地に扇が丘ヤグラダ遺跡が位置する。



第1図 野々市町位置図

第2節 歴史的環境

扇が丘ヤグラダ遺跡は縄文・古代・中世を主体とする遺跡である。当遺跡周辺は加賀の守護富樫氏の守護所であった富樫館跡が所在する関連からか、中世の遺構、遺物が非常に多く確認されており、中世期の開発が窺える。また、弥生時代・古代の遺跡が確認されていることから当地での連継とした人々の営みを垣間見ることができる。当遺跡周辺の主要遺跡について順に紹介していく。

縄文時代の遺跡は手取川扇状地扇端部に多く立地しており、後晩期の御経塚遺跡、新保本町チカラモリ遺跡、中屋遺跡、米泉遺跡など北陸地方の縄文時代後晩期の標識遺跡をはじめ大規模な集落が営まれていた遺跡が集中している。

弥生時代に入ると各地に遺跡が散在する。前期では乾遺跡があげられ、中期の遺跡は上荒原遺跡で確認されるがこの時期の遺跡は散発的で少數である。後期に入ると集落展開が活発になり、遺跡は急激に増加する。当遺跡に近く高橋セボネ遺跡、扇が丘ハワイゴク遺跡、扇台遺跡、押野地区では押野タチナカ遺跡、押野ウマタリ遺跡、押野大塚遺跡など大小の遺跡が所在する。

古墳時代の遺跡は扇状地開発の過程で削平されたものが多く、他時代に比べて確認されている遺跡は少ない。僅かな中に古墳時代前期の御経塚シンテン遺跡がある。方墳11基、前方後円墳3基が確認されている。

古代に入ると野々市町南部方面でかなりの密度で遺跡の集中が見られる。野々市西南端に位置する末松庵寺跡は7世紀後半の金堂、塔跡などを確認しており、現在は国の指定史跡となっている。8~9世紀に入ると下新庄アラチ遺跡、上林新庄遺跡をはじめとする集落跡が手取扇状地の扇端部に散在するようになる。特に上林新庄遺跡では、有力階層集団の居住域と思われる大型の掘立柱建物跡や堀などが確認されている。

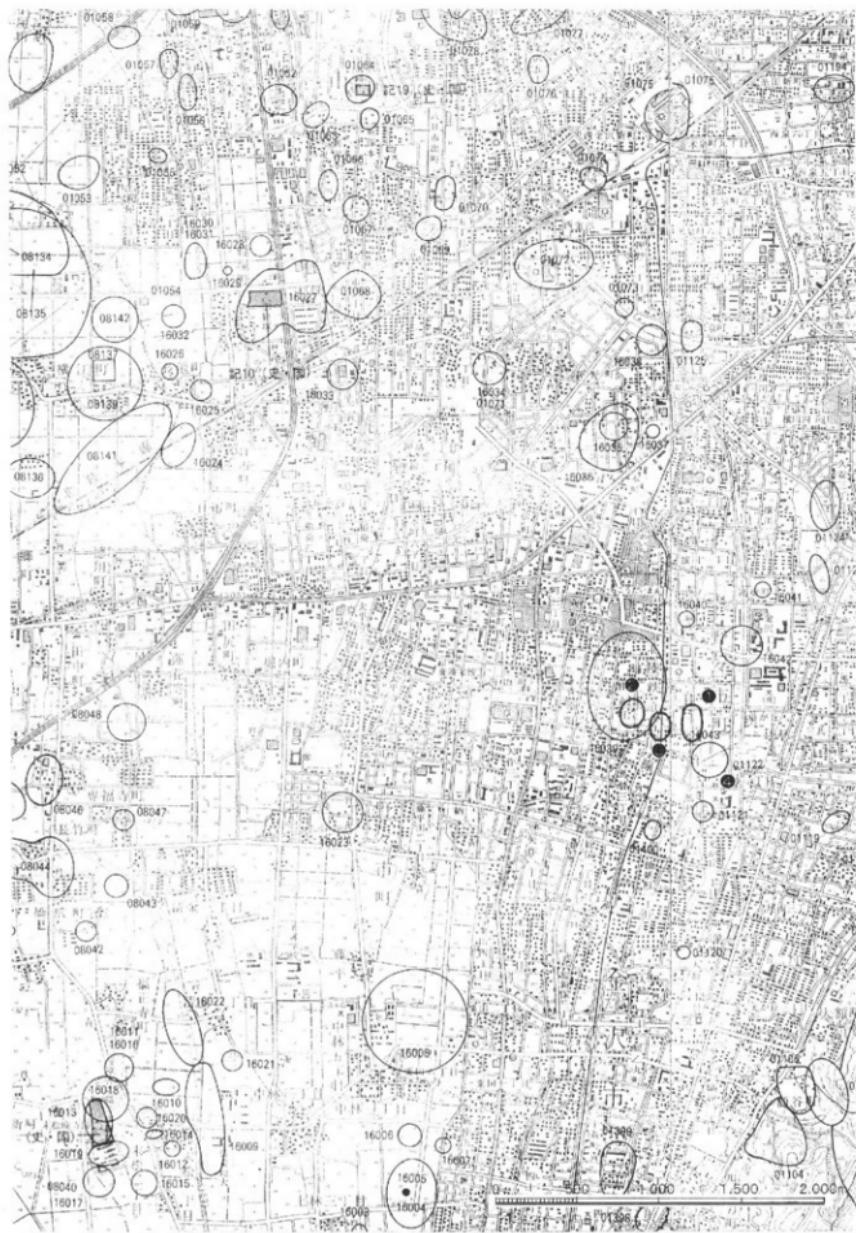
中世以降の遺跡では各地で城館遺跡が見つかっており、本報告となる扇が丘ヤグラダ遺跡より西に500m程離れた所に、加賀国守護富樫氏の守護所のあった富樫館跡が所在する。富樫氏は南北朝時代から室町期にかけて野々市を拠点に館を構え、その周辺は加賀国の政治・経済・文化の中心地となっていた。館の所在地は未だ明らかでないが本遺跡周辺に「ジョウカク」「ナガドイ」などの字名が残っており、富樫館跡存在の可能性を持っている。現在まで15箇所の発掘調査を行い、遺跡の状況が少しづつ

つ見えてきている。特に1994年度(平成6年度)の調査時には、上幅約6m、下幅約1m、深さ約2.5mの堀跡が確認され、富岩館跡の場所が少しづつ明らかになりつつある。また、本調査区の南東150m程に位置する扇が丘ハワイゴク遺跡では大型の掘立柱建物跡や12世紀後半～13世紀中頃の遺物が出土している。中世後期では集落地と耕作地を区分し集落を形成する14世紀後葉～16世紀前半の長池キタノハシ遺跡が野々市町の北側に位置する。

第1表 遺跡地図凡例

野々市町		
①	扇が丘ヤグラダ遺跡	01056 矢木マツノキダ遺跡(弥～古)
②	富岩館跡鬼ヶ城地区	01057 矢木ヒガシクラ遺跡(弥・古)
③	富岩館跡蛭土居地区	01058 上原陣跡機遺跡(弥・古)
④	扇が丘ハワイゴク遺跡	01059 矢木ジワリ遺跡(弥・古)
16003	上林テラダ遺跡(奈)	01062 森戸住宅遺跡(楢)
16004	上林新庄遺跡(楢・古～中)	01063 新保本町西遺跡(弥・古)
16005	上林古墳(古)	01064 新保本町チカモリ遺跡(楢)
16006	下新庄アラチ遺跡(奈)	01065 新保本町東遺跡(楢・古)
16007	下新庄タナカダ遺跡(奈・半)	01066 新保本町ツカダ遺跡(弥)
16008	栗田遺跡(楢・奈・平)	01067 新保本町南遺跡(中)
16009	末松A遺跡(楢・平)	01068 八日市B遺跡(楢・奈・平)
16010	末松B遺跡(楢)	01069 八日市サカイマツ遺跡(楢・奈・平)
16011	末松福正寺遺跡(古・平)	01070 八日市ヤスマル遺跡(楢・奈・平)
16012	末松古墳(古)	01072 押野西遺跡(楢・弥・平・奈)
16013	末松庵寺(奈・平)	01073 押野大塚古墳(古)
16014	末松C遺跡(奈・平)	01074 西金沢新町遺跡(奈・平)
16015	法福寺跡(?)	01075 日本たばこ金沢工場遺跡(奈・平)
16016	福正寺跡(平)	01076 保古町遺跡(奈・平)
16017	末松岩跡(?)	01077 黒田B遺跡(平)
16018	末松ダイカン遺跡(奈～中)	01078 古府遺跡(楢)
16019	大館跡(奈～室)	01104 鶴谷遺跡(古)
16020	古元堂跡(?)	01105 鶴谷ドウシンドラ遺跡(楢～古)
16021	末松信濃源跡(中)	01106 鶴谷城跡(平)
16022	清金アガトウ遺跡(平～中)	01119 高尾公園遺跡(平)
16023	三林館跡(安)	01121 扇台遺跡(弥)
16024	二日市イシバチ遺跡(中)	01123 久松トノヤシキ遺跡(古)
16025	長池キタノハシ遺跡(楢・奈)	01124 久松さんまい川遺跡
16026	長池ニシンボ遺跡(楢・弥・室)	01125 米泉遺跡(楢・弥・平)
16027	御経塚遺跡(楢・弥・奈～中)	01194 増田穴田遺跡(弥・古)
16028	御経塚C遺跡(古)	01398 四十万遺跡(楢)
16029	御経塚経塚(?)	01399 三十刈遺跡(奈～平)
16030	御経塚シンテン遺跡(楢・弥・古)	01400 馬替遺跡(楢)
16031	御経塚シンテン古墳群(古)	松任市
16032	御経塚オソツ遺跡(弥)	08042 檜爪松ノ木遺跡(中)
16033	野代遺跡(楢)	08043 檜爪遺跡(楢・弥・中・近)
16034	上官寺跡(室)	08044 長竹遺跡(楢～古・中)
16035	押野船跡(室)	08045 乾町遺跡(楢～近)
16036	押野タチナカ遺跡(弥～古)	08046 専福寺遺跡(中)
16037	押野ウマワタリ遺跡	08047 高田遺跡(楢・平)
16038	押野大塚遺跡(楢・弥)	08048 高田ノダ遺跡(弥)
16039	宮櫻館跡(中)	08134 横江莊々家跡(平)
16040	高橋ウバガタ遺跡(弥)	08135 横江莊遺跡(奈・平)
16041	高橋セボネ遺跡(弥・奈)	08136 横江ゴクラクジ遺跡(楢・中)
16042	扇が丘ゴショ遺跡(弥～中)	08137 横江館跡(中)
	金沢市	08138 横江A遺跡(楢・弥)
01053	上荒屋遺跡(楢～平)	08139 横江B遺跡(平)
01055	上荒屋住宅遺跡(楢～平)	08140 横江C遺跡(古)
		08141 横江D遺跡(?)

(「石川県遺跡地図」石川県教育委員会1992に加筆)



第2図 周辺の遺跡(1/25,000)「石川県遺跡地図」石川県教育委員会1992に加筆

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 経緯

近年、野々市町は市街化が急速に進み、都市計画道路の整備、各地での土地区画整理事業による都市開発が進んでいる。扇が丘周辺も例外ではなく、本報告の扇が丘ヤグラダ遺跡は、野々市町扇が丘住吉土地区画整理事業に伴い実施された緊急発掘調査である。平成6年に野々市町都市計画課より埋蔵文化財試掘調査の依頼が野々市町教育委員会に提出され、直ちに区画整理事業施行区域において試掘調査を実施したところ、富樫館跡・鷹土居地区、富樫館跡・鬼ヶ窪地区（野々市町教育委員会2001）と扇が丘ヤグラダ遺跡、扇が丘ハイゴク遺跡の計4遺跡が存在することが確認された。この結果について野々市町都市計画課へ報告し、両者で発掘調査の対応について協議を開始したこと、平成8年度より発掘調査を実施することとなった。

第2節 経過

扇が丘ヤグラダ遺跡の発掘調査は第1次調査を1997年度（平成9年度）に、第2次調査を1998年度（平成10年度）にそれぞれ実施している。整理作業は平成11年度～平成12年度にかけて実施した。

1997年度（平成9年度）調査

調査期間 9月20日～11月19日で面積3,000m²を調査した。9月20日より重機による表土除去作業を開始し、10月3日より作業員を導入し、検出作業を始めた。遺跡縁辺部にあたる調査区北東部分より検出を開始したため遺構・遺物共に希薄であったが南に向かうに従って少しではあるが遺構が増えてくる。掘立柱建物跡を7棟検出している。

1998年度（平成10年度）調査

調査期間 5月14日～9月10日で、面積5,000m²を調査した。調査区が道路を挟んで東西に分かれていたため、東側より調査開始することとし、5月14日より重機による表土除去作業を開始した。5月21日より作業員を導入し、検出作業を行い、遺構は竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡6棟を検出した。6月8日より残り西側の表土除去作業を開始し、遺構検出は6月16日より行った。西側では掘立柱建物跡11棟、中世期の土坑1基、近世溝3条を検出している。調査区西南隅に落ち込み部分が見られるが、西側部分は東側よりも遺構密度が高くなっている。

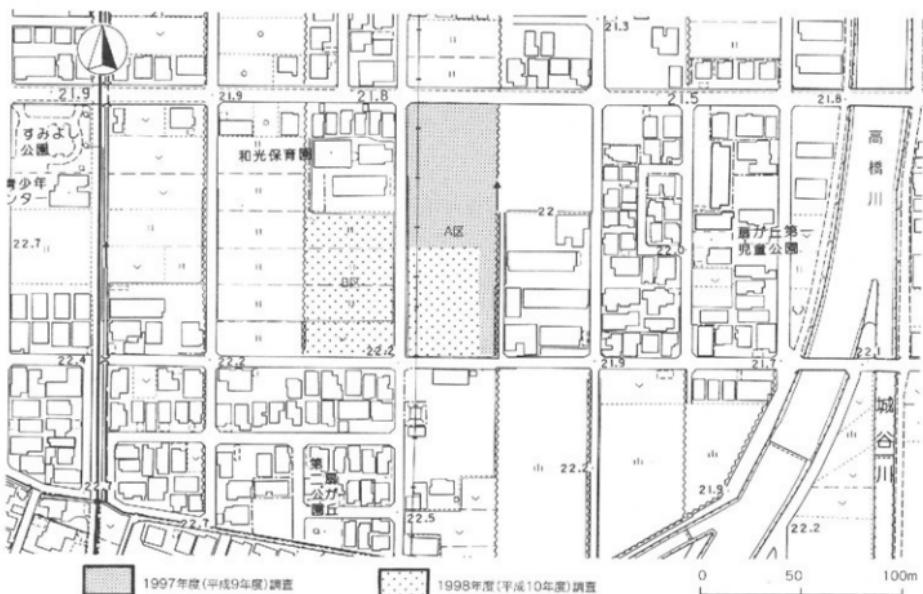
なお、本報告では道路を挟んで東側をA区、西側をB区とする。（第4図）



調査風景



第3図 扇ヶ丘住吉地区画整理事業による発掘調査区 ($S=1/5,000$)



第4図 扇ヶ丘ヤグラダ追跡調査区図 ($S=1/2,500$)

第3章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

扇が丘ヤグラダ遺跡では、縄文時代・古代・中世・近世の遺物、遺構が確認されている。縄文時代に限っては確実に時期が特定できる遺構はなく、遺物が少量あるのみである。遺跡の主体となるのは古代・中世で、該期の遺構、遺物が確認されており、遺構としては古代…堅穴建物跡1棟(SI01)、中世…掘立柱建物跡24棟(SB01～SB24)、土坑2基(SK01、SK02)などがある。古代の遺物はこのSI01からの出土がほとんどで8世紀中葉から9世紀初頭に位置付けられると思われる。

近世以降の遺物が出土した遺構には溝状遺構(SD04、SD05、SD07、SD10)などがある。

以下では、調査によって確認された主要遺構、遺物について説明していく。

第2節 縄文時代の遺物

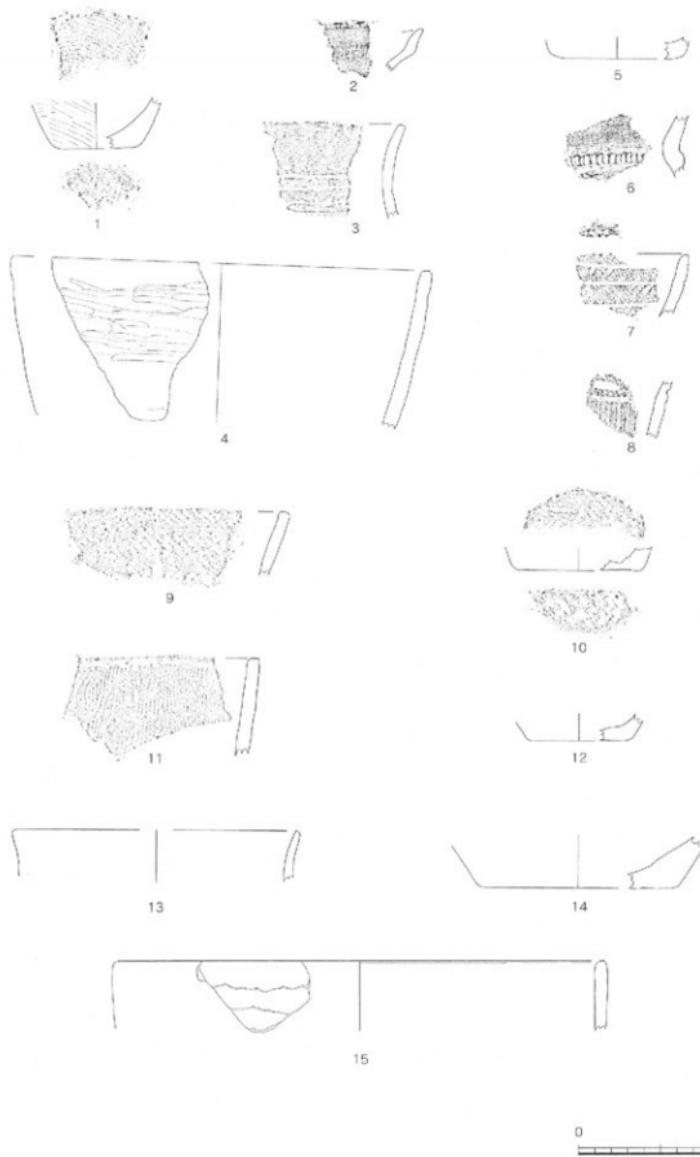
縄文時代と位置付けできる遺構がないため、遺物のみの説明とする。なお、下記で述べている遺構は古代以降のものである。

遺物(第5～9図、写真図版11・12)

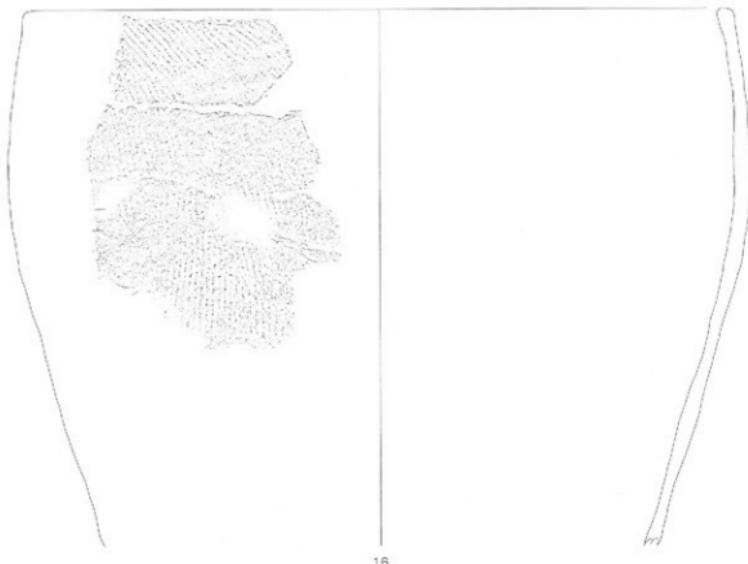
SK01からは深鉢の底部、口縁が出土している。(1)は、外側に斜位の条痕文が施されており、内面にはミガキがかけられている。(2)は内外面にミガキがかけられ、波状口縁になると思われる。SD10からは、横位の沈線を施し、その沈線間に「コ」で結ぶ沈線が見られる深鉢の口縁が出土している(3)。P04からは内外面にミガキのかかった深鉢の口縁が出土している(4)。P05からは深鉢底部(5)が出土している。石製品では打製石斧がSD01、SD04、SD06、SD07、SD08、SD10より各1点出土している。

包含層出土遺物(第5～9図、写真図版11・12)

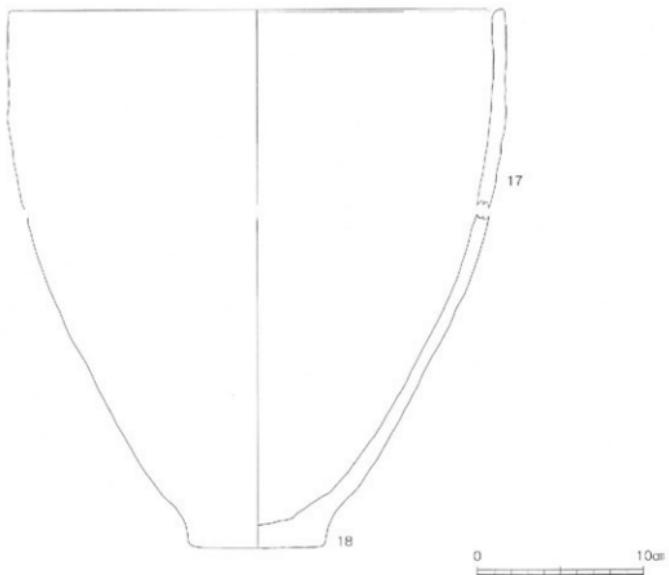
(6)は深鉢の口縁～胴部で、くびれ部分横位に縦帶をはり、刺突文を施している。刺突文下部に沈線が1本確認できる。内外面ともミガキがかかっている。(7)は深鉢の胴部で外面は横位に沈線を3本引き、その上に縄文LRを斜位に施している。(8)は深鉢胴部で、縦条痕を入れた後、押引列点文と沈線を入れている。縄文晚期後葉にあたる。(9)は粗製の深鉢の口縁で磨耗が著しいが外面と口縁端部に縄文RLが横位に施されている。内面はミガキである。(10)は深鉢の底部で圧痕がみられる。(11)は粗製の深鉢の口縁で外面に縄文LRを斜位に施し、内面にはミガキがかけられている。(12)は深鉢の底部である。(14)は深鉢の底部で外面は縄文が施されているが磨耗が著しいため詳細は不明である。(15)は粗製深鉢の口縁で内外面にナデ調整が施され、外面には粘土ヒモの接合痕が見られる。内面に二次的被熱が確認できる。(16)は深鉢で口縁～胴部外面に縄文が施され、内面はナデ調整である。(17)は深鉢の口縁で内外面ともミガキがかけられている。(18)は深鉢の胴部～底部で外面は無文でミガキの痕跡が見られ、内面は磨耗が著しいため不明である。(17)とは同一個体になる可能性がある。石製品では打製石斧(19)～(37)19点が出土している。



第5図 純文遺物 ($S=1/3$)



16



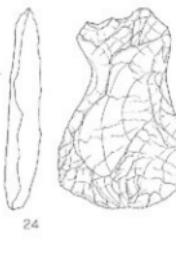
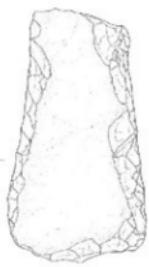
0 10cm

第6図 繩文遺物 (S-1/3)



19

23



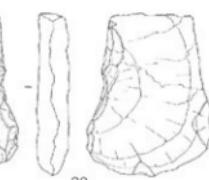
20

24



21

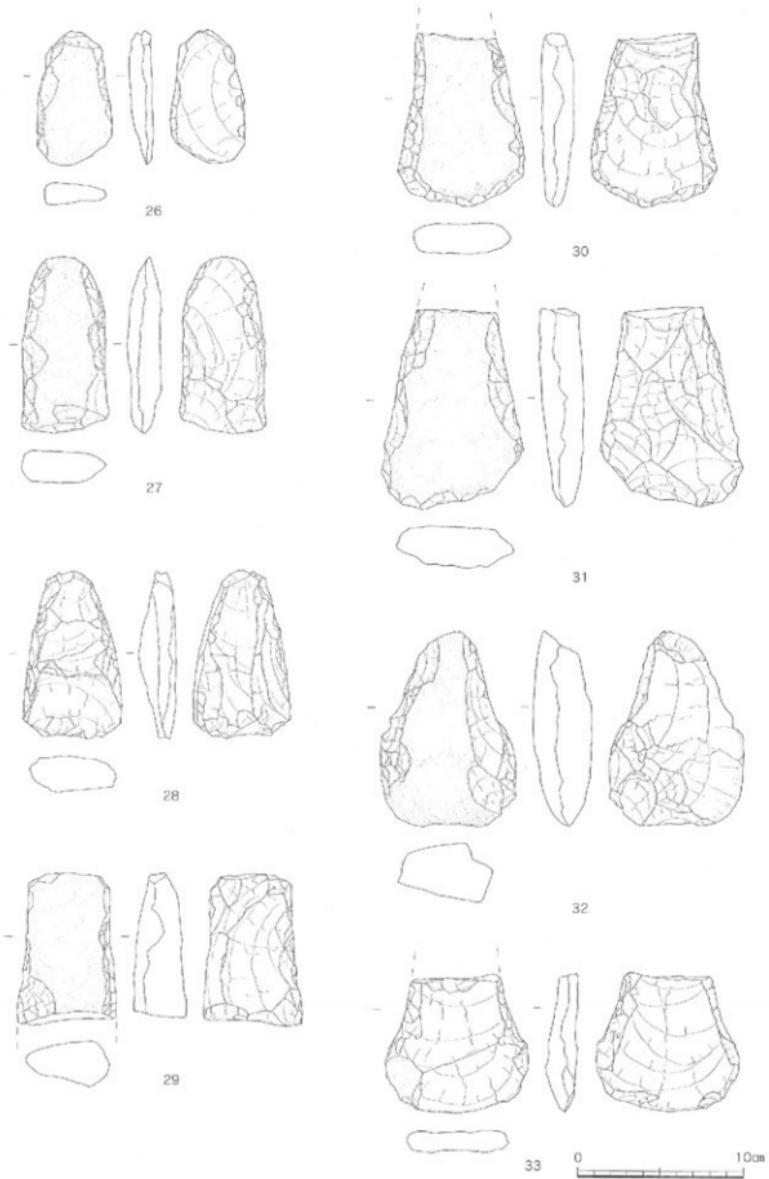
25



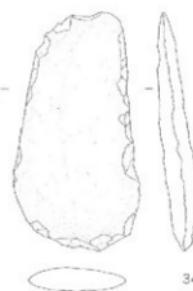
22

0 10cm

第7図 繁文遺物 (S=1/3)



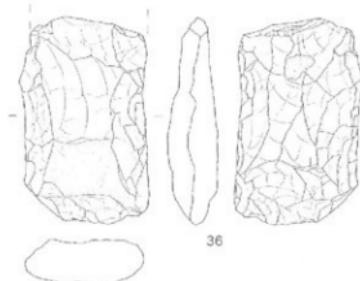
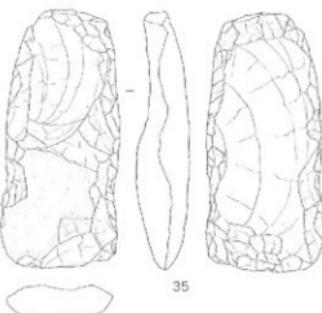
第8図 石器遺物 ($S=1/3$)



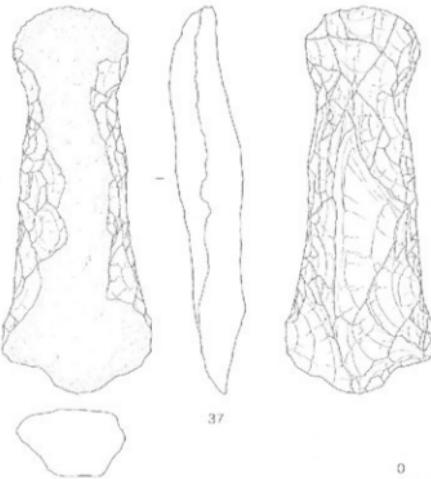
34



35



36



37

0 10cm

第9図 鋸文遺物 ($S=1/3$)

第3節 古代の遺構と遺物

(1) 穴穴建物跡 (SI01)

遺構 (第10図、写真図版6) 当調査での穴穴建物は1棟のみの検出であった。A区の南に位置し、長径3.9m、短径3.55mのやや歪な隅丸方形プランを有している。焼土が遺構内に広がる形で確認され、然を受けた行も出土している。壁溝はないが、内部に多数のピットを持ち、うち主柱となるのはP1、P2で2本主柱構造と思われる。柱穴はP1が径50cm、深さ42cmでP2が径42cm、深さ31cmである。カマドは東南コーナーで検出され、煙道と思われる穴も確認された。

遺物 (第11図、写真図版13) 建物内に散在しており、カマド内からも上師器窯が出土している。須恵器は数点(环)だけではなくなどが上師器窯藏具であった。須恵器环(38~40)のうち40は高松産のIV²期³と思われる。土師器の小型壺(41~43)、上師器窯(44~52)がほかに出土しており、石製品では(53)の砥石1点であった。時期は8世紀中葉から9世紀初頭に位置付けられると思われる。

その他の遺物 (第12図、写真図版13)

中近世の遺構から出土した古代遺物は次のとおりである。

P01、P03からは須恵器环(54・56)が出土し、(54)は体部から口縁が外傾している。V期に該当すると思われる。P02からは上師器窯の口縁(55)が出土した。SD02からは須恵器环底部(57)、SD07からは土師器有台环(58)、SD09からは須恵器蓋端部(59)、包含層からは須恵器有台环底部(60)、須恵器环底部(61)、上師器窯底部(62)、土師器窯口縁(63~66)が出土している。

第4節 中世の遺構と遺物

(1) 据立柱建物跡 (SB01~SB24)

遺構

SB01 (第13図) A区北西に位置する。主軸方位をN11°Wにとり、梁行2間(4.30m)×桁行3間(7.10m)、床面積30.5m²の規模を有する南北棟の純柱建物である。東側桁行P1~P4の柱間は、2.9m~2.7m~1.4m、西側桁行P9~P12の柱間は3.0m~3.0m~1.5mと北側寸法が短い構造になっている。北側梁行P4~P12の柱間は2.2m~2.1m、南側梁行P1~P9の柱間は2.1m~2.1mである。

柱穴は、径20~50cmで深さ14~30cmを測る。

SB02 (第13図)

A区北西、SB01の南に位置する。主軸方位をN5°Eにとり、梁行3間(5.40m)×桁行5間(7.20m)、床面積38.88m²の歪な軸をとった南北棟の純柱建物である。東側桁行P1~P4の柱間は、1.45m~2.15m~1.6m、西側桁行P15~P19の柱間は1.9m~1.9m~2.1m~1.5mを測る。

北側梁行P4~P19の柱間は1.9m~2.1m~1.6m、南側梁行P5~P15の柱間は2.05m~1.3mを測る。柱穴は、径28~52cm、深さ14~33cmを測る。

SB03 (第14図)

A区北西、SB02の南西に位置し、主軸をN2°Eにとる。西部分は調査区外となるため、床面積等は定かではない。1辺は4間で8.6mを有する。P1~P5の柱間は2.2m~1.8m~2.3m~2.3mを測る。柱穴は、径28~56cm、深さ14cm~29cmを測る。

SB04 (第14図)

A区東に位置する。南北2間(4.3m)の柱穴1列を確認した。主軸はN6°Eをとる。西側P1~P3の柱間は2.1m~2.3mである。柱穴は径38~66cmで、P3はテラスをもつ梢円形で抜き取りの可能性もある。深さは17~32cmを測る。

SB05 (第14図)

A区のほぼ中央、SB04の南西に位置する。主軸をN5°Eにとり、梁行(1.95m)×桁行(1.95m)、床面積3.8m²の規模を有するほぼ正方形プランであるが、軸線が若干ずれる。南側P1~P3の柱間は1.0m

—0.95mである。柱穴は径24~36cm、深さ14~18cmを測る。

SB06 (第15図)

A区中央より東側、SB05の東側に位置する。主軸をN30°Eにとり梁行1間(1.5m)×2間(4.85m)、床面積7.27m²を有する。南側P1~P3の柱間は2.4m~2.45m、北側P4~P6の柱間は2.3m~2.55mを測る。東側P3~P6柱間は1.5mを測る。柱穴は、径24~46cm、深さ17~21cmである。P5より須恵器の甕が1点出土している。

SB07 (第15図)

A区SB05より南へ10m程離れた場所に位置する。側柱建物で主軸をN7°Eにとり、梁行1間(3.3m)×桁行2間(3.5m)、床面積11.55m²を測る。南側P1~P3の柱間は1.6m~1.7m、北側P4~P6の柱間は1.7m~1.5mを測る。東側P3~P6の柱間は3.3mである。柱穴は、径は42~68cm、深さ10~28cmを測る。

SB08 (第15図)

A区SB07の東南に位置する。主軸をN1°Eにとり、梁行1間(3.15m)×桁行2間(4.15m)、床面積13.07m²を有する東西棟の側柱建物である。南側P1~P3の柱間は2.2m~2.0m、北側P4~P6柱間は2.3m~2.0mを測る。東側P3~P6柱間は3.0mである。柱穴は、径30~45cm、深さ16~42cmを測る。

SB09 (第16図)

A区SB08と重複するように位置する。主軸をN3°Eにとり、梁行2間(3.95m)×桁行4間(8.7m)、床面積34.36m²を測る南北棟の総柱建物である。東側桁行P1~P5の柱間は2.4m~2.2m~2.1m~2.1m、西側桁行P11~P15の柱間は2.4m~2.3m~2.4m~1.85mを測る。南側梁行P1~P11柱間は2.0m~1.9m、北側梁行P5~P15柱間は1.9m~2.3mを測る。径は30~82cmとばらつきがあり、深さは12~46cmを測る。P4・P7・P8からは土解壺、P12からは土解甕、P13からは須恵器环口縁が出土しているが流れ込みによるものと考える。柱穴の切り合い関係から建物はSB08より古い。

SB10 (第16図)

A区SB07の南西に位置する。主軸をN12°Eにとり、梁行2間(4.3m)×桁行3間(7.45m)、床面積32.2m²を測る南北棟の総柱建物である。東側桁行P1~P4の柱間2.3m~2.95m~2.2m、西側桁行P9~P12の柱間は2.3m~2.95m~2.2mを測り、真中1間が広い。南側梁行P1~P9柱間は2.15m~2.15m、北側梁行P4~P12柱間は2.2m~2.2mを測る。径は26~58cm、深さは8~33cmを測る。

SB11 (第17図)

A区SB10と重なるように位置する。主軸をN12°Eにとり、梁行1間(3.0m)×桁行2間(4.2m)、床面積12.6m²を測る側柱建物である。南側桁行P1~P3の柱間2.0m~2.2m、東側梁行P3~P6柱間は3.0mを測る。柱穴は、径は20~40cm、深さは12~35cmを測る。

SB12 (第17図)

A区西壁付近で1列のみ確認した。主軸をN7°Wにとる。P1~P3の間隔は1.2m~1.15mを測る。北部分が搅乱により壊されていることから北部分に伸びる可能性もある。径は54~60cm、深さは33~40cmを測る。柱の間隔が狭いことから建物以外の用途に使用された可能性もある。

SB13 (第17図)

A区南、西側壁付近に位置する。主軸をN3°Wにとる梁行2間(3.4m)×桁行5間(8.4m)、床面積28.56m²を測る南北棟の総柱建物である。東側桁行P1~P6柱間は1.7m~2.0m~1.55m~1.5m~1.7m、西側桁行P12~P17柱間は1.7m~2.0m~1.45m~1.5m~1.8mを測る。南側梁行P1~P12柱間は1.5m~2.0m、北側梁行は1.55m~1.6mを測る。柱穴は径26~56cm、深さ5~7cmを測る。

SB14 (第18図)

B区北側壁際に位置する。主軸をN15°Wにとる。柱穴が調査以外へ伸びる可能性があるため、規模は明確ではないが、梁行1間以上、桁行4間(9.3m)、床面積は20.46m²以上になる。南側桁行P1~P5の柱間は2.05m~2.6m~2.45m~2.2m、西側梁行P1~P6柱間は2.2mを測る。柱穴は、径30~

40cm、深さ17~32cmを測る。

SB15 (第18図)

B区SK01西隣に位置する。主軸をN10°Eにとる。梁行1間以上(1.6m)×桁行3間(5.2m)、床面積8.32m²を測る建物である。東側桁行P1~P4柱間は2.1m~2.0m~1.1mと南側1間が狭くなる。南側梁行P1~P5柱間は1.7mを測る。柱穴は径25~50cm、深さ18~43cmを測る。

SB16 (第19図)

B区SB15の南西に位置する。主軸をN3°Eにとる。梁行2間(4.9m)×桁行3間(7.7m)、床面積37.73m²を測る南北棟の総柱建物である。東側桁行P1~P4柱間は2.6m~2.5m~2.65m、南側梁行P1~P9柱間は2.5m~2.3mを測る。柱穴は径26~50cm、深さは10~33cmを測る。

SB17 (第19図)

B区SB16と重なるように位置する。主軸N3°Wにとる。梁行2間(3.6m)×桁行3間(5.0m)、床面積18.0m²を測る南北棟の総柱建物である。東側桁行P1~P4柱間は1.45m~2.3m~1.35mで真中の1間が広く、南北両側の1間が狭い構造になっている。南側梁行P1~P9柱間は2.0m~1.65mを測る。柱穴は、径26~52cm、深さは19~40cmを測る。P1からは土師皿が出上している。

SB18 (第20図)

B区西壁付近、SB14西南に位置する。主軸をN6°Wにとる。梁行2間(4.5m)×桁行2間(5.6m)、床面積25.2m²を測る南北棟の総柱建物である。東側桁行P3~P9柱間は3.1m~2.25m、南側梁行P1~P3柱間は2.25m~2.25mを測る。東西両側には柱列が立つ。柱穴は、径36~60cm、深さは29~50cmを測る。

SB19 (第21図)

B区SB18の南隣に位置する。主軸をN11°Wにとる。梁行2間(4.8m)×桁行2間(5.75m)、床面積27.6m²を測る南北棟の総柱建物である。東側桁行P3~P9柱間は3.05m~3.3m、南側梁行P1~P3柱間は2.4m~2.4mを測る。四面に柱列が並ぶ構造になるとと思われるが、P14とP15間の袖がずれたため建物を全て塞ぐ形にはならない。柱穴は径32~56cm、深さ34~50cmを測る。

SB20 (第22図)

B区SB19と重複するように位置する。主軸を真北にとる。梁行1間(2.4m)×桁行3間(3.7m)、床面積8.88m²を測る東西棟の側柱建物である。南側桁行P1~P4の柱間は1.0m~1.4m~1.3m、西側梁行P1~P5の柱間は2.4mを測る。柱穴は、径25~35cm、深さは11~38cmを測る。

SB21 (第22図)

B区SB20と重複する。主軸をN1°Eにとる。梁行2間(3.8m)×桁行3間(6.0m)、床面積22.8m²を測る南北棟の総柱建物である。東側桁行P3~P12の柱間は1.5m~2.1m~2.1mで南側1間が狭くなっている。南側梁行P1~P3の柱間は1.95m~1.75mを測る。径30~56cm、深さ17~44cmを測る。

SB22 (第23図)

B区南に位置する。主軸をN3°Eにとり、梁行2間(4.5m)×桁行4間(10.6m)、床面積47.7m²を測る南北棟の総柱建物である。北東隅の柱穴はSK02が位置するため存在しない。西側桁行P11~P15の柱間は2.3m~2.9m~2.9m~2.45m、南側梁行P1~P11の柱間は2.2m~2.2mを測る。柱穴径26~64cm、深さ24~44cmを測る。

SB23 (第24図)

SB22と重複するように位置する。主軸をN2°Eにとる。梁行2間(4.7m)×桁行3間(8.2m)、床面積38.54m²を測る南北棟の総柱建物である。東側桁行P1~P4柱間は2.9m~2.8m~2.65m、南側梁行P1~P9柱間は2.4m~2.3mを測る。柱穴径は26~50cm、深さ19~44cmを測る。

SB24 (第25図)

SB23の東隣に位置する。主軸をN4°Eにとる。梁行2間(4.45m)×桁行4間(10.25m)、床面積45.61m²を測る南北棟の総柱建物である。東側P10~P14の柱間は2.4m~2.85m~2.65m~2.5m、南側梁行P

1～P10の柱間は2.15m～2.3mを測る。柱穴径は26～36cm、深さ8～25cmを測る。

(2)柱列

遺構

SA01 (第13図) P1～P7のL字型の柱列である。P1～P7の柱間寸法は1.95m～1.6m～2.0m～2.0m～1.6m～2.3mを測る。柱穴は径14～34cm、深さ16～25cmである。

SA02 (第13図) SB02西側桁行に近接する柱列である。P1～P4の柱間寸法は1.6m～3.75m～1.7mの計7.05mを測る。柱穴は径30～56cmで深さ14～29cmを測る。

SA03 (第18図) SB15西側桁行に近接し、P1～P5が南北に並ぶ柱列である。P1～P5の柱間寸法は1.8m～2.2m～1.9m～1.9mの計7.8mを測る。柱穴は径26～35cmで深さは12～35cmを測る。

SA04 (第19図、写真図版4) SB16の西側桁行の柱列である。P1～P4の柱間寸法は2.55m～2.7m～2.55mの計7.8mを測る。柱穴は径26～34cmで深さは26～27cmを測る。

SA05 (第19図、写真図版4) SB16の東側桁行の柱列である。P1～P4の柱間寸法は2.6m～2.6m～2.7mの計7.9mを測る。柱穴は径20～30cm、深さは11～23cmを測る。

SA06 (第19図、写真図版4) SB17の西側桁行、南側梁行をL字型に囲む柱列である。南側P1～P3の柱間寸法は2.55m～2.45mの計5.0m、東側P3～P7の柱間寸法は2.1m～1.55m～1.35m～1.6mの計6.6mを測る。柱穴は径30～42cm、深さ17～25cmを測る。

SA07 (第20図、写真図版4) SB18の西側桁行に近接するP1～P5まで南北に並ぶ柱列である。P1～P5までの柱間寸法は1.9m～2.0m～2.9m～3.1mで計9.9mを測る。柱穴は径20～36cmを測り、深さは11～26cmを測る。

SA08 (第20図、写真図版4) SB18の東側桁行に近接するP1～P6までの柱列である。P1～P6の柱間寸法は1.95m～2.0m～2.3m～1.6m～1.6mで計9.45mを測る。柱穴は径30～42cm、深さは18～46cmである。

SA09 (第21図、写真図版4) SB19を開む柱列である。P14とP15にずれが生じているため、完全なロの字型にはならない。北側が他柱列よりも近接している。南側P1～P5の柱間寸法は2.0m～1.4m～2.1m～1.7m、西側P5～P10の柱間は2.1m～0.95m～1.8m～1.6m、北側P10～P14の柱間は1.5m～1.85m～2.1m～1.5m、東側P14～P18の柱間は1.6m～1.5m～1.55m～1.8mを測る。柱穴は径22～48cm、深さは13～50cmを測る。

SA10 (第22図、写真図版5) SB21西側桁行に近接する柱列である。P1～P6の柱間寸法は1.45m～1.5m～1.3m～1.55m～1.6mで計7.4mを測る。柱穴は径26～38cmで深さ18～33cmを測る。

SA11 (第23図、写真図版5) SB22を開む柱列である。P1、P22間はSK02に切られているため確認出来なかった。東側桁行P1～P8の柱間寸法は1.05m～1.35m～1.55m～1.4m～1.65m～1.35m～1.8m、南側梁行P8～P12の柱間は2.2m～1.75m～1.7m～1.65m、西側桁行P12～P19の柱間は1.6m～1.45m～3.0m～1.4m～1.25m～1.6m～2.0m、北側梁行P19～P22の柱間は1.2m～2.6m～1.7mを測る。柱穴は径22～44cm、深さ13～48cmを測る。

SA12 (第24図、写真図版5) SB23の東側桁行、西側桁行、南側梁行を開む柱列である。東側P1～8の柱間寸法は1.1m～1.2m～1.5m～1.4m～1.65m～1.5m～1.9m、南側P8～P12の柱間は2.7m～1.6m～1.55m～1.75m、西側P12～P19の柱間は2.2m～1.85m～1.2m～1.2m～1.4m～1.4m～1.35m～1.4mを測る。柱穴の径は22～50cmで深さは6～48cmとばらつきがある。

SA13 (第24図、写真図版5) SB23の北側梁行に近接する柱列で、P1～P5の柱間寸法は1.9m～1.5m～1.9m～1.9mを測る。柱穴の径は30～44cm、深さは24～48cmを測る。

SA14 (第26図) SB07東隣に位置し、P1～P6まで東西に並ぶ。P1～P6は1.8m～1.35m～2.0m～1.65m～2.45mの計9.25mを測る。柱穴は径26～58cm、深さは18～47cmであった。

SA15 (第26図) SI01の南側、SB13の東側に位置する。P1～P4は1.85m～1.6m～2.55mの計6.0mの東西列である。柱穴の径は22～26cm、深さは15cm～27cmであった。

(3)土坑

遺構

SK01 (第27図、写真図版7)

B区北東に位置し、東側は調査区外になるため明確な長さ及び面積は不明である。南北2.35m×東西1.2m以上になり検出面からの深さは42cmであった。覆土には少量であるが焼土が混じり、最下層は礫層であった。遺物は縄文土器と土師皿の小片が出土し、SB15の東南隅の柱穴を切っていることからSB15よりも新しい時期のものであると思われる。

SK02 (第28図、写真図版8)

B区SD06の前、SB22の北東隅を切る形で確認された。径2.1m×2.0mで深さ76cm、最下層は礫層であった。

遺物 (第29図、写真図版14) (67) は珠洲の甕で、12世紀代のものと思われる。第30図実測図では口縁部と底部が同一個体のように示してあるが、後の詳細な観察で口縁部と底部の胎土や表面の叩きの入り方などに若干違いが見られることから別個体になる可能性がある。

(4)溝

遺構

SD03 B区西壁際に位置し、調査区外に伸びることから幅、長さは明らかでないが長さ19.5m、最大幅1.6m以上になると思われる。深さ5cm～20cmで内部にピットが数基見られる。覆土は暗灰色(黄色、黒色ブロック混)一層であった。

遺物 (第29図、写真図版14) (68) は中国染付の皿で、底部は釉剥ぎである。16世紀前半のものであると思われる。

遺構

SD08 SB22の東隣に位置し、長さ4.6m、幅15cm～1.05mである。内部に数個のピットをもち、最深部は23cmであった。

遺物 (第29図、写真図版14) (69) は上師器の皿で、口縁は内済し、面取りされている。12世紀後半～13世紀前半のものと思われる。

(5)ピット

P05, 06, 07 遺物 (第29図、写真図版14) (70～72) は土師皿である。(72)は口縁端部をつまみ上げるように処理している。12世紀前半～13世紀後半のものである。

(6)不明遺構

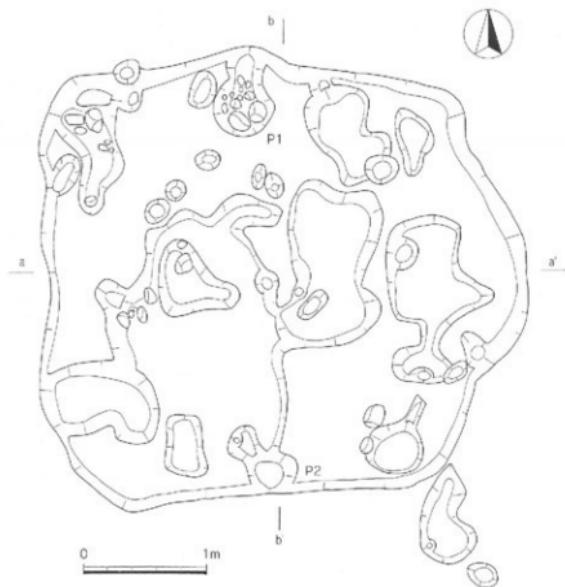
SX01 A区より検出され、長辺約1.8mの広な長楕円形である。最深部は16cmであった。

遺物 (第30図、写真図版14) 土師皿(73)、土師碗(74～77)が出土している。

包含層出土遺物 (第29図、写真図版14)

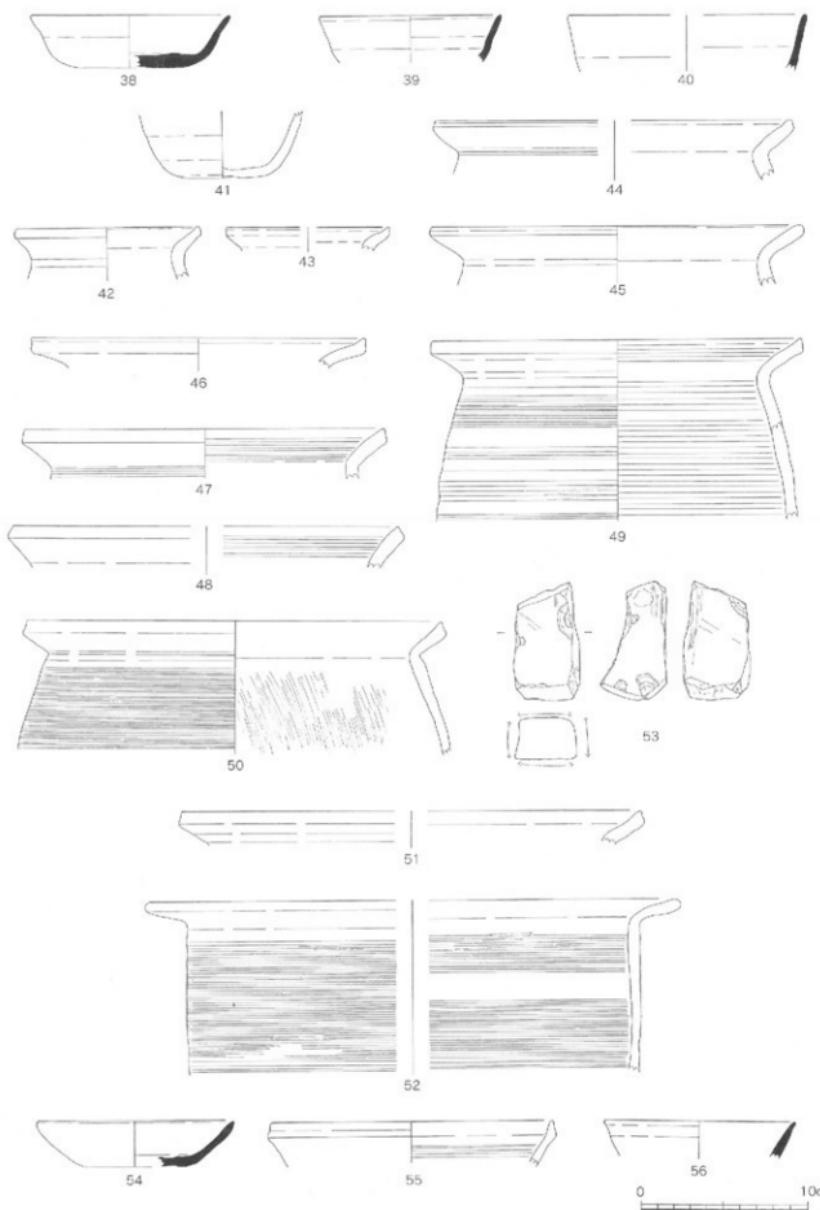
中世以降の遺構や包含層から出土した遺物には以下のものがある。

SD04からは土師皿(78・79)、青磁碗(80・81)、珠洲櫛鉢(82)、石硯(83)、鏡(84)が出土している。(80)は15世紀のもので、(81)は14世紀後半～15世紀の端反碗である。(83)は高崎産でやや軟質な石を使用しており、外側の立ち上がりが開いている。戦国時代後期のものと思われる。(84)は銅製で上部にあ

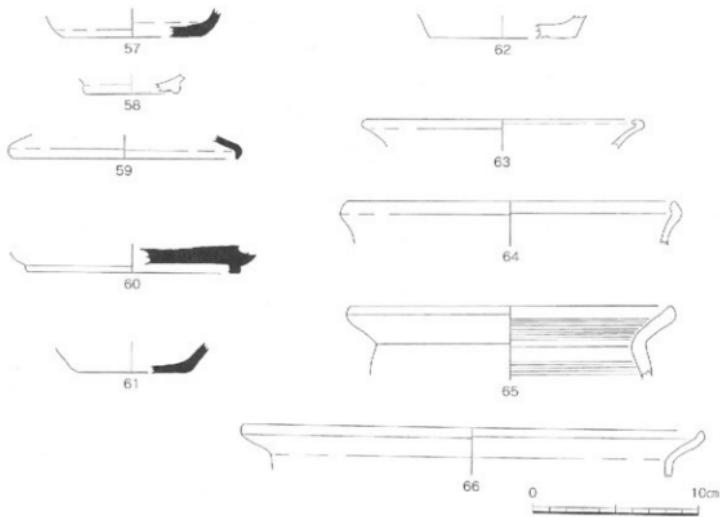


- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1. 淡灰黄色粘质土 | 11. 黑色粘质土 |
| 2. 淡黄色粘质土 | 12. 底黄色粘质土(铁分混) |
| 3. 淡灰色粘质土 | 13. 黑褐色粘质土 |
| 4. 灰色粘质土 | 14. 深黄色粘质土 |
| 5. 黑灰色粘质土 | 15. 灰色粘质土(铁土混) |
| 6. 淡反黄色粘质土(铁土混) | |
| 7. 赤灰色粘质土(铁土混) | |
| 8. 淡灰色粘质土 | |
| 9. 淡反黄色粘质土 | |
| 10. 黑黄色粘质土 | |

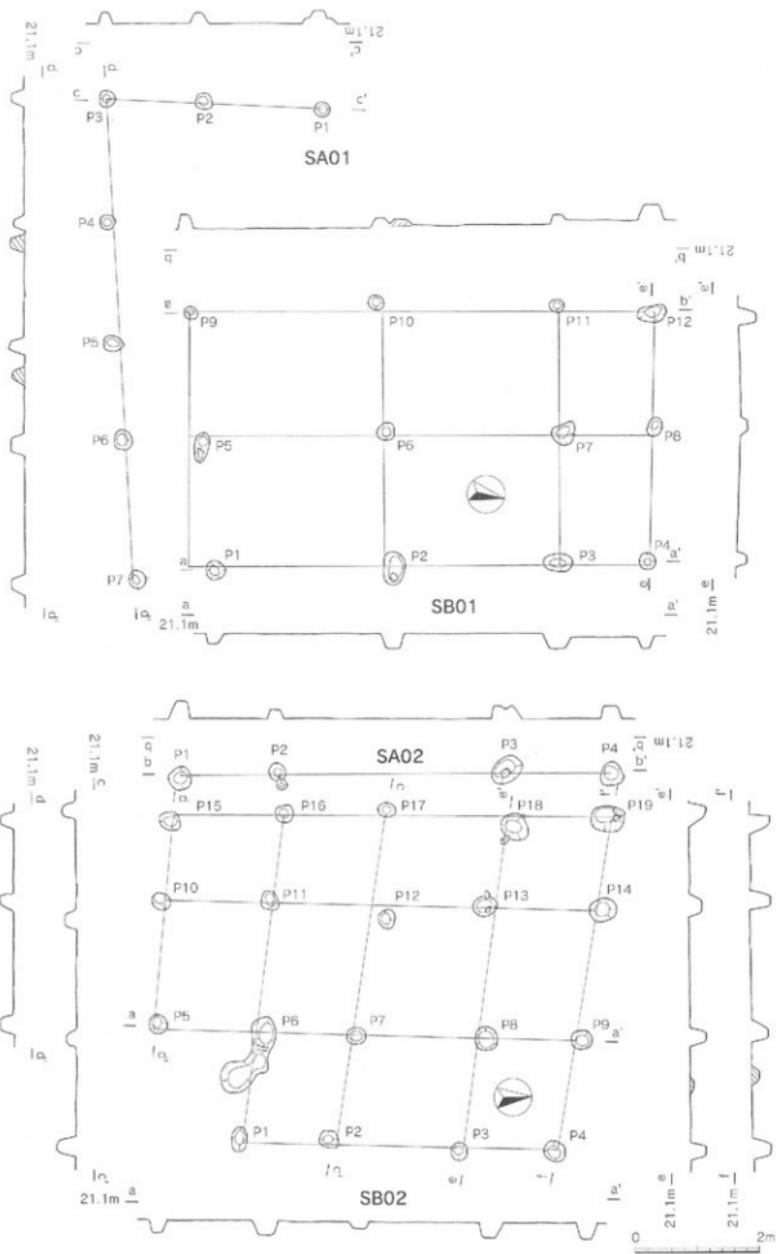
第10図 A区 SI01平面図・土層断面図 (S=1/40)



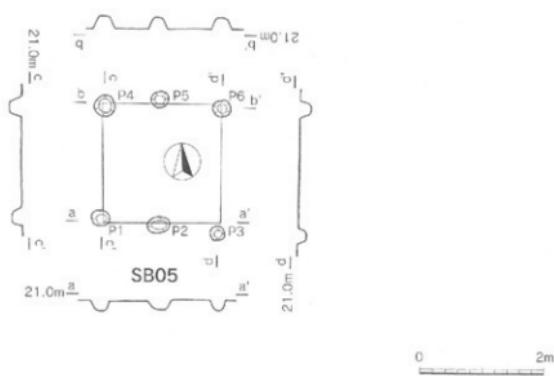
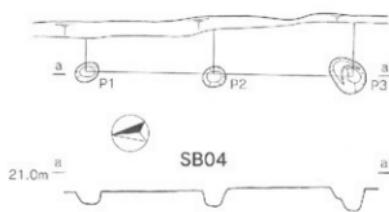
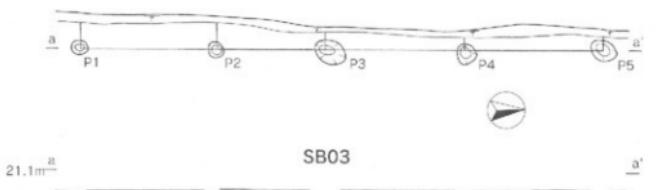
第11図 古代遺物 ($S=1/3$)



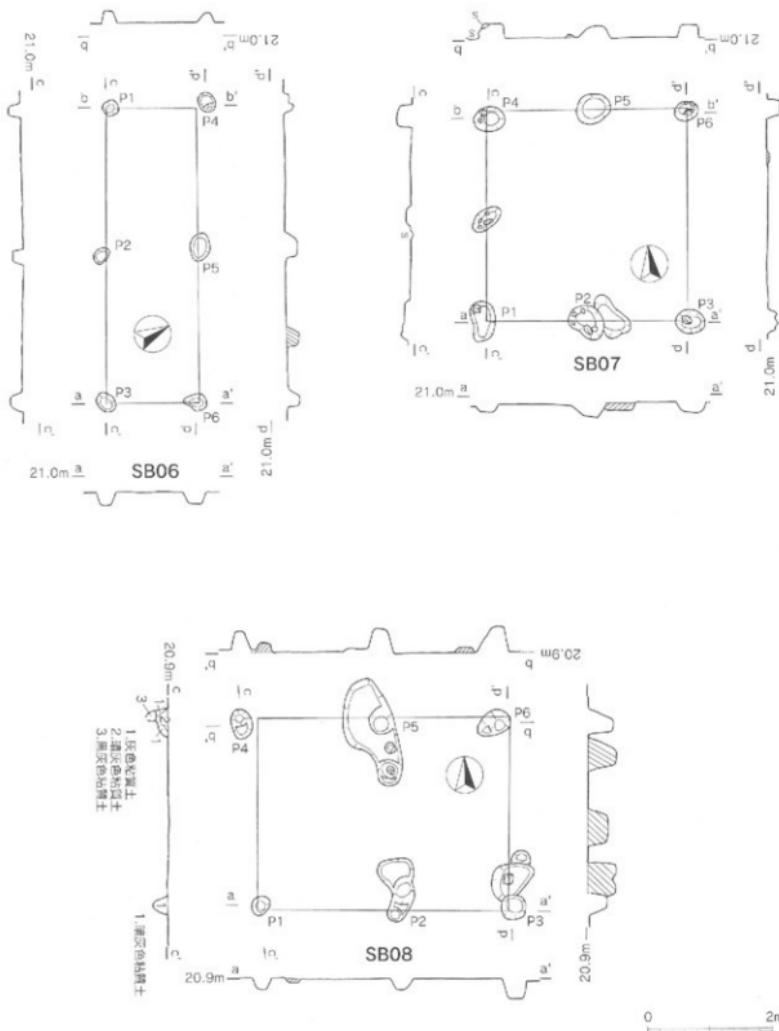
第12図 中世遺構出土の古代遺物 (S=1/3)



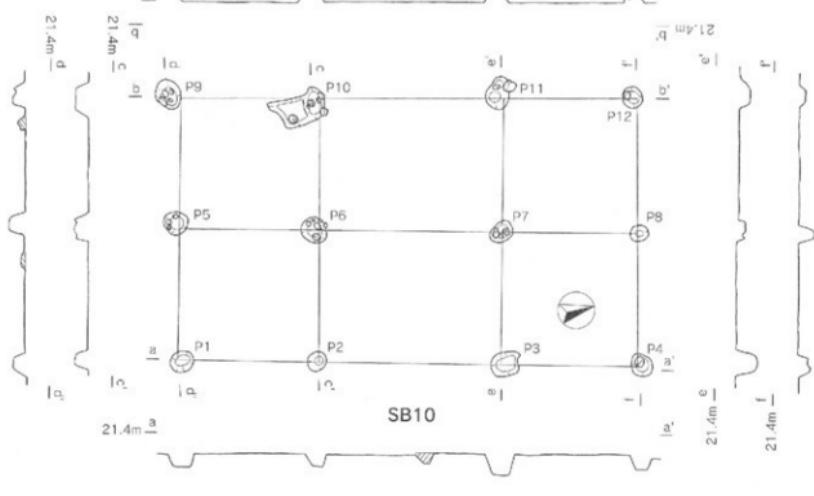
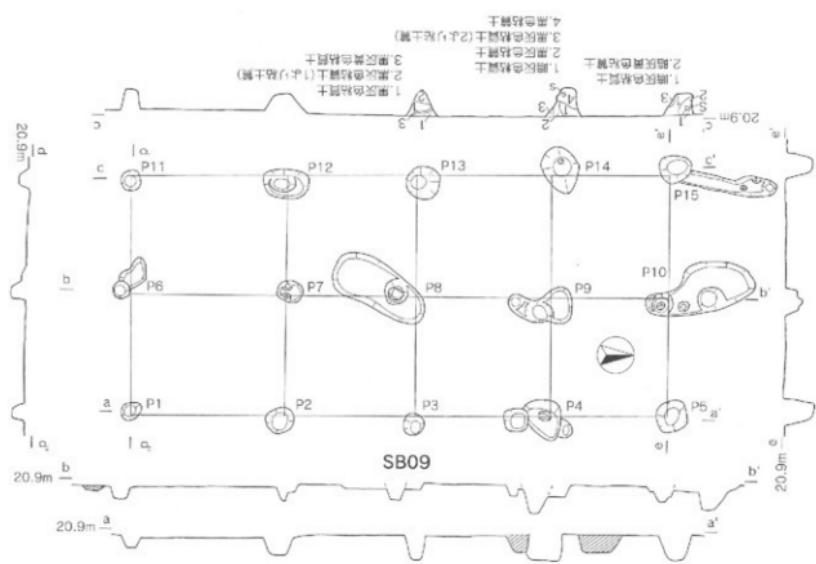
第13図 Alx SB01、SB02、SA01、SA02平面図・土層断面図 (S-1/80)



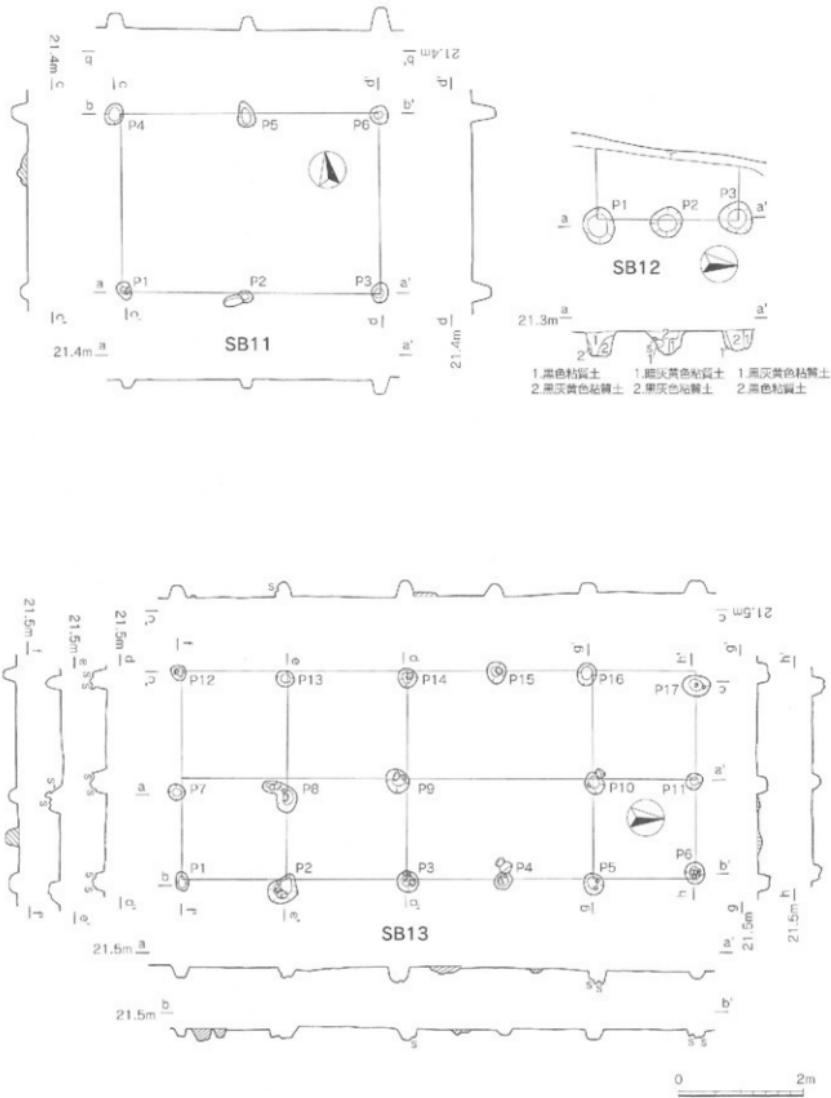
第14図 A区 SB03、SB04、SB05平面図・土層断面図 (S-1/80)



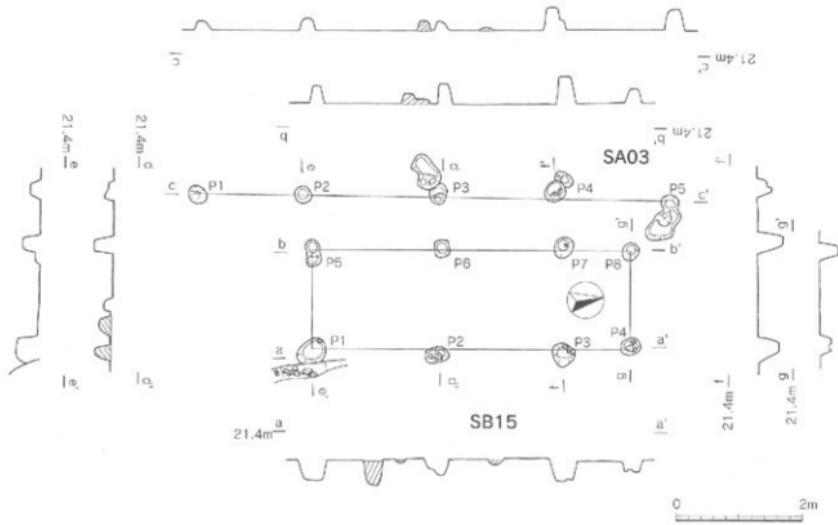
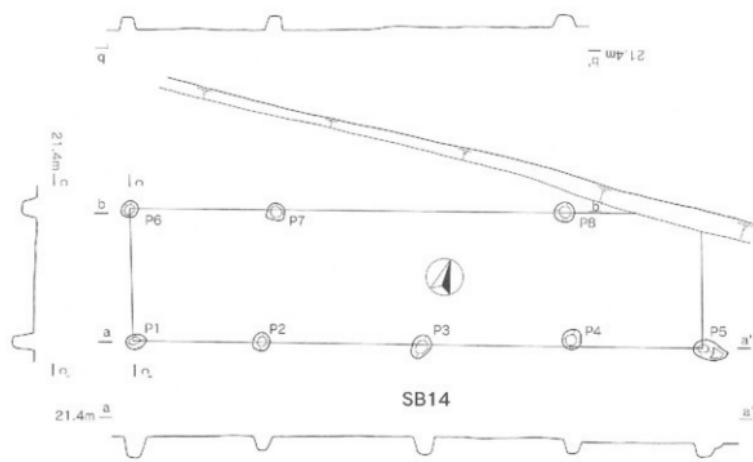
第15図 A区 SB06、SB07、SB08平面図・土層断面図 (S=1/80)



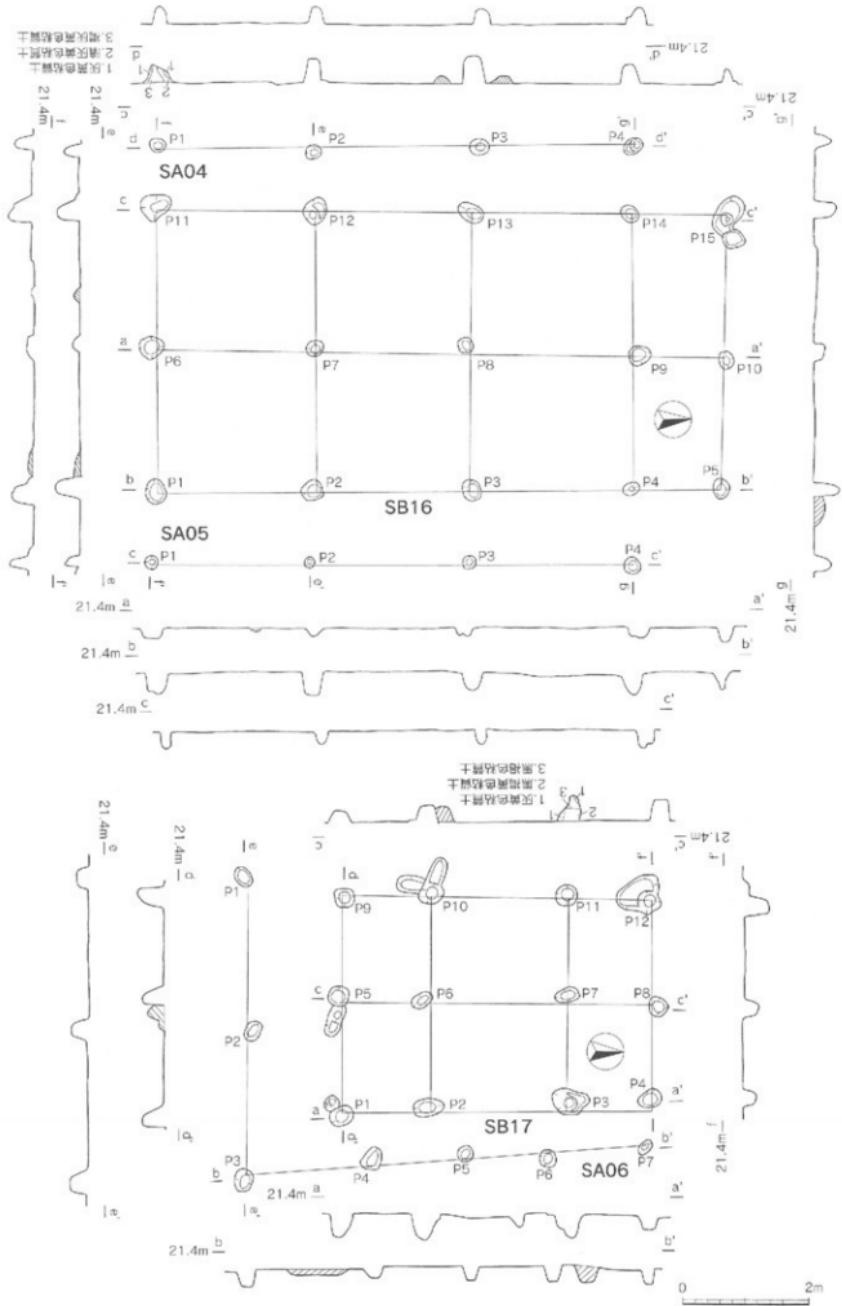
第16図 AI区 SB09, SB10平面図・上層断面図 ($S=1/80$)



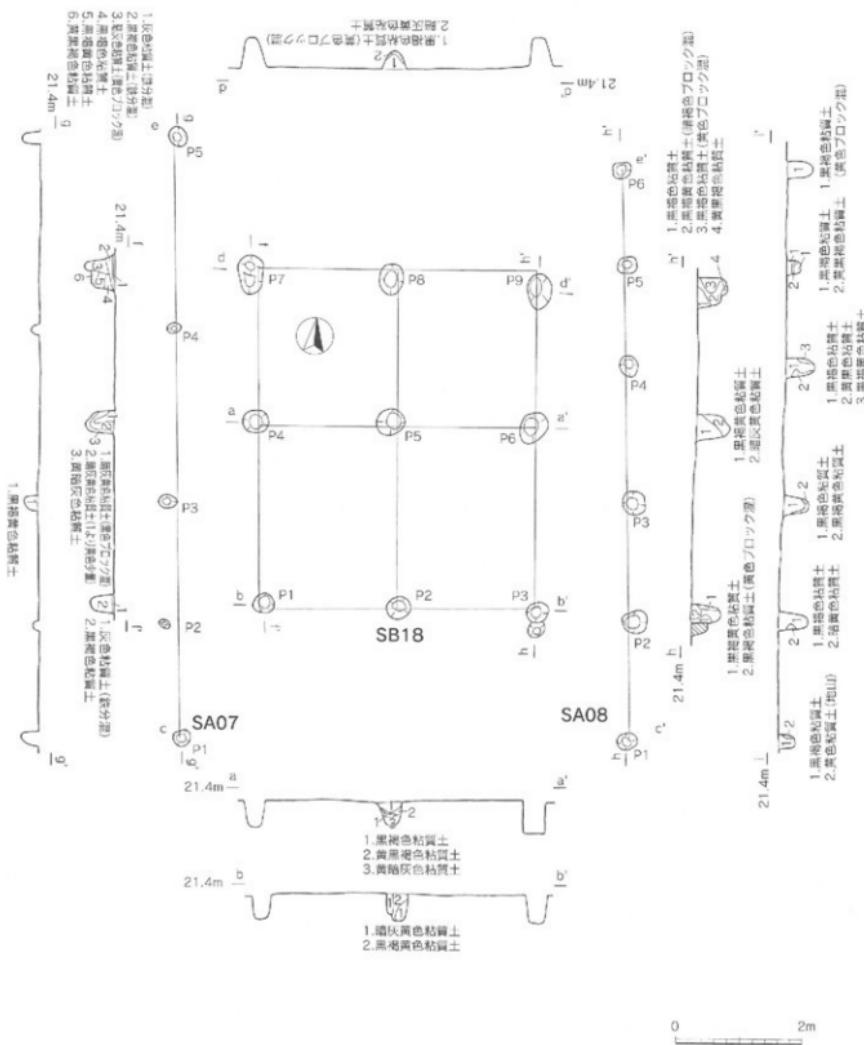
第17図 AIK SB11、SB12、SB13平面図・上層断面図 (S=1/80)



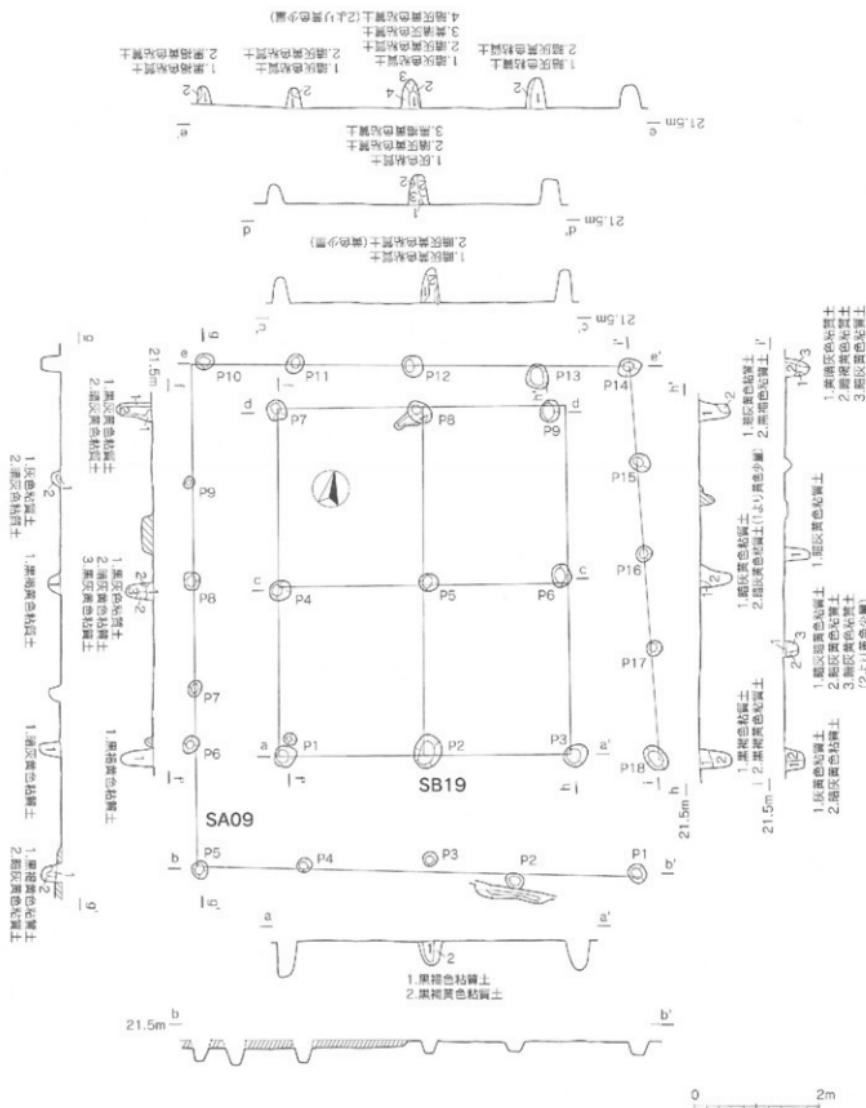
第18図 BI区 SB14、SB15、SA03平面図・土層断面図 (S-1/80)



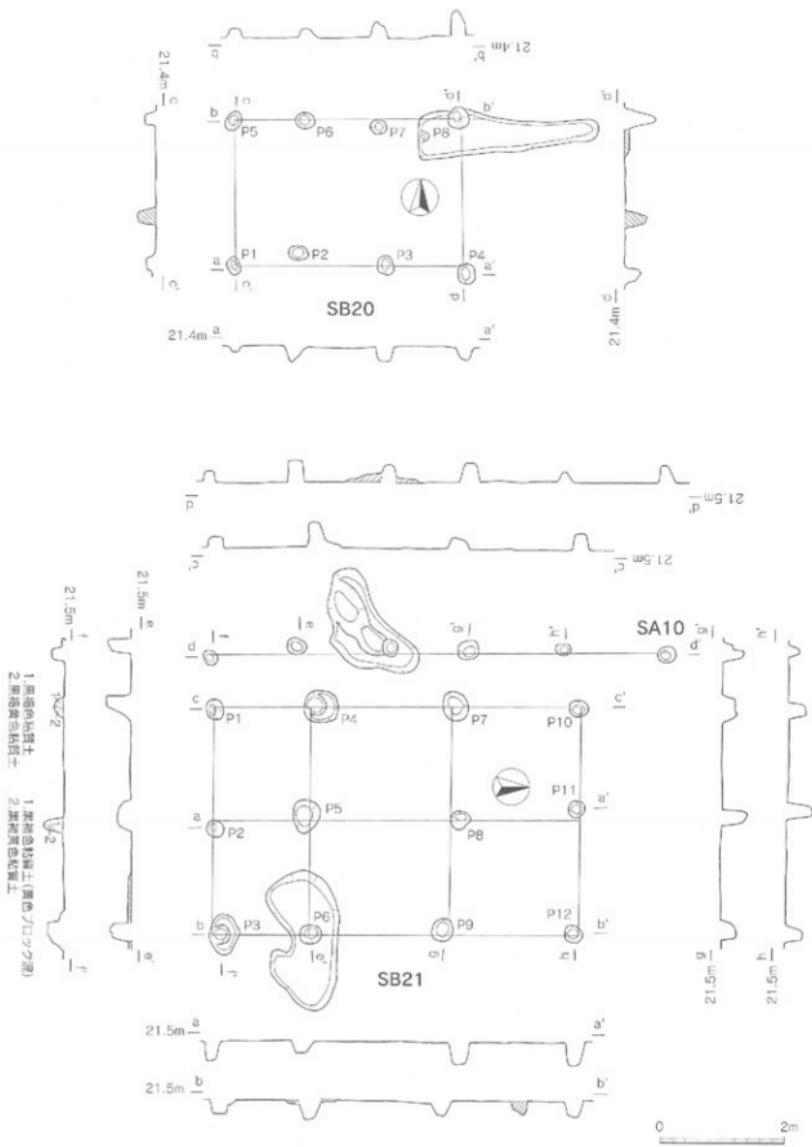
第19图 B区 SB16、SB17、SA04、SA05、SA06平面图·土层断面图 (S=1/80)



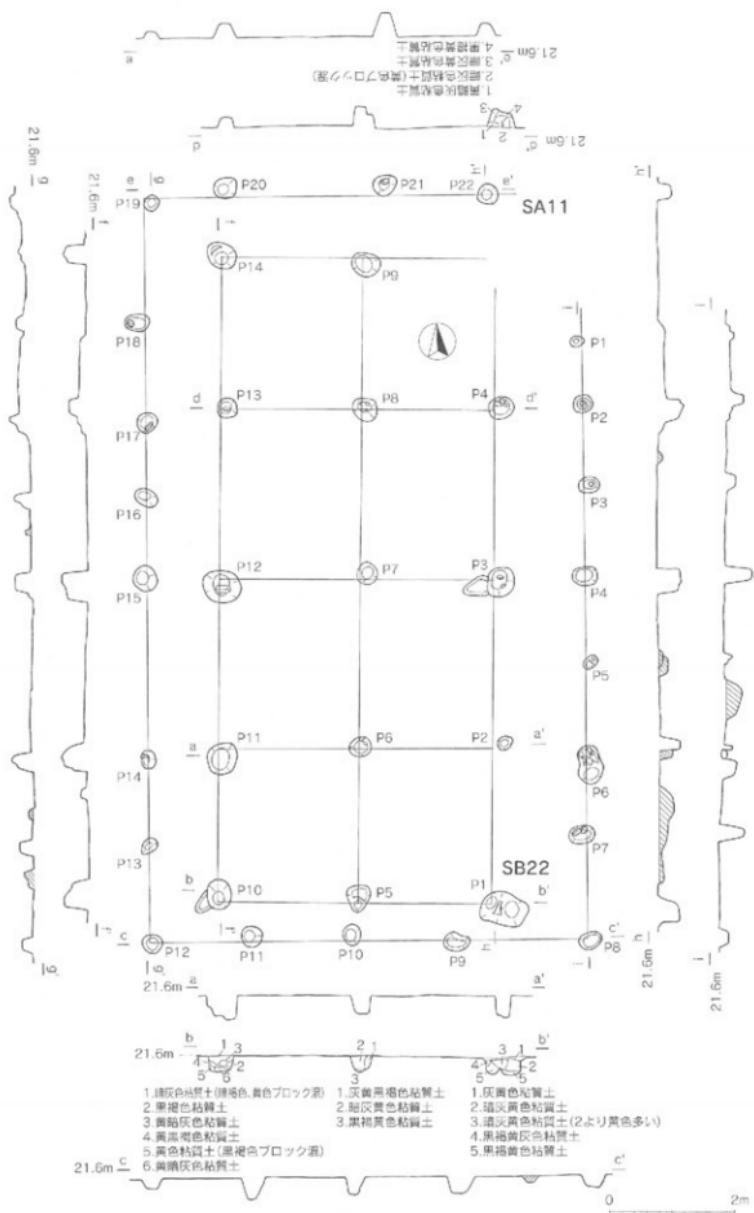
第20図 B区 SB18、SA07、SA08平面図・土層断面図 (S-1/80)



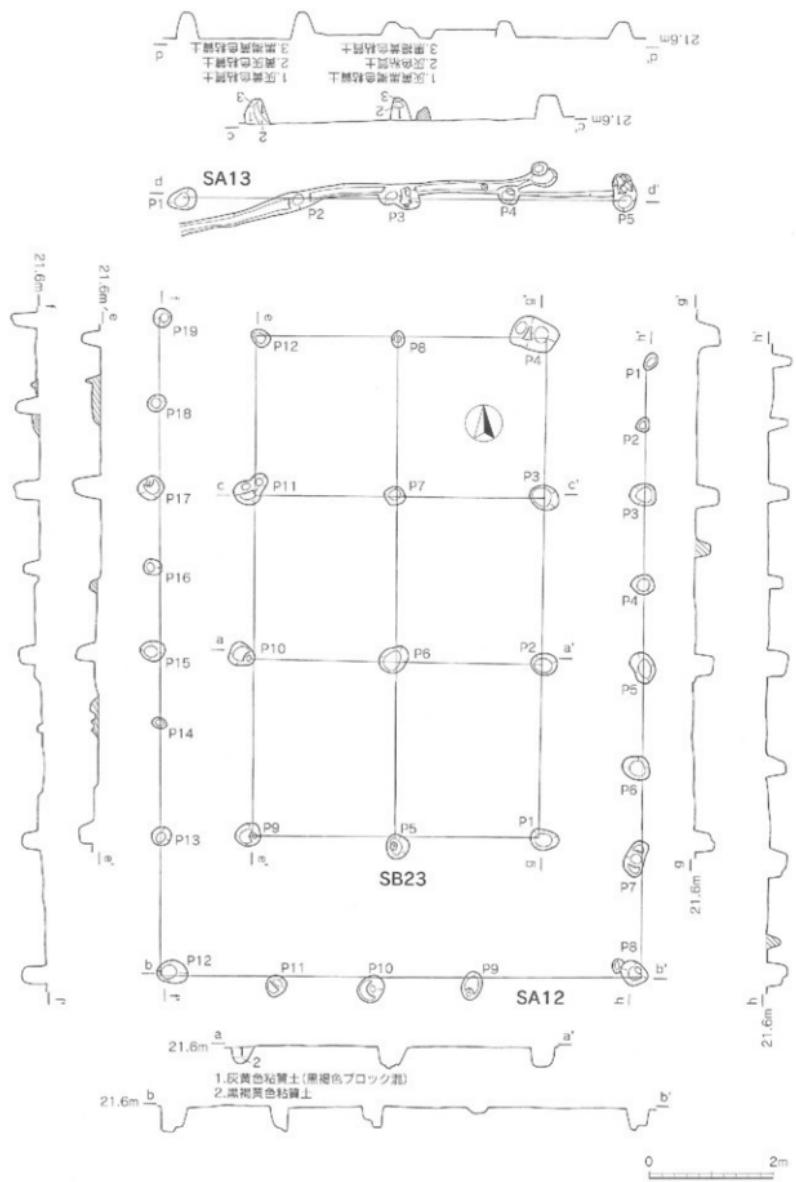
第21図 B区 SB19、SA09平面図・土層断面図(S=1/80)



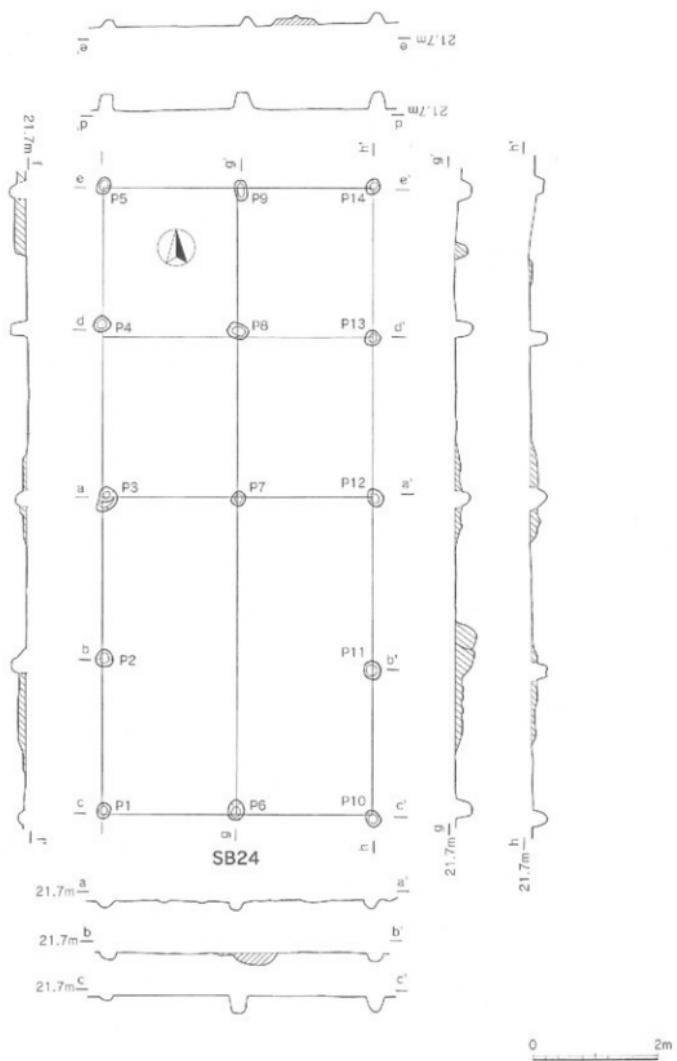
第22図 BI区 SB20、SB21、SA10平面図・上層断面図 (S=1/80)



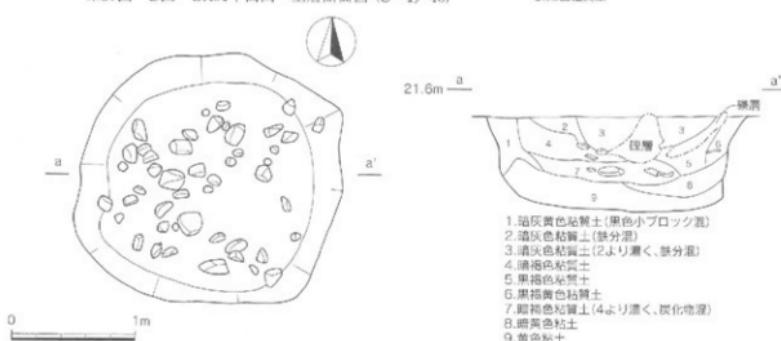
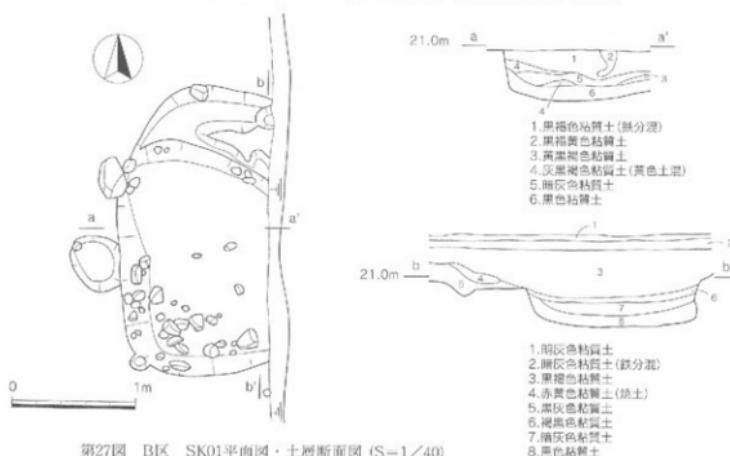
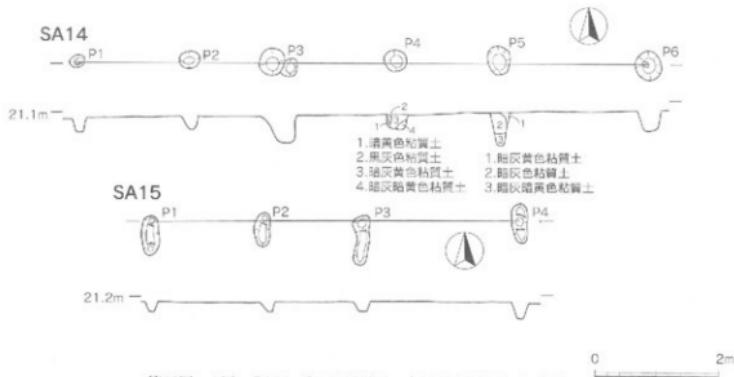
第23図 B区 SB22、SA11平面図・土層断面図(S-1/80)

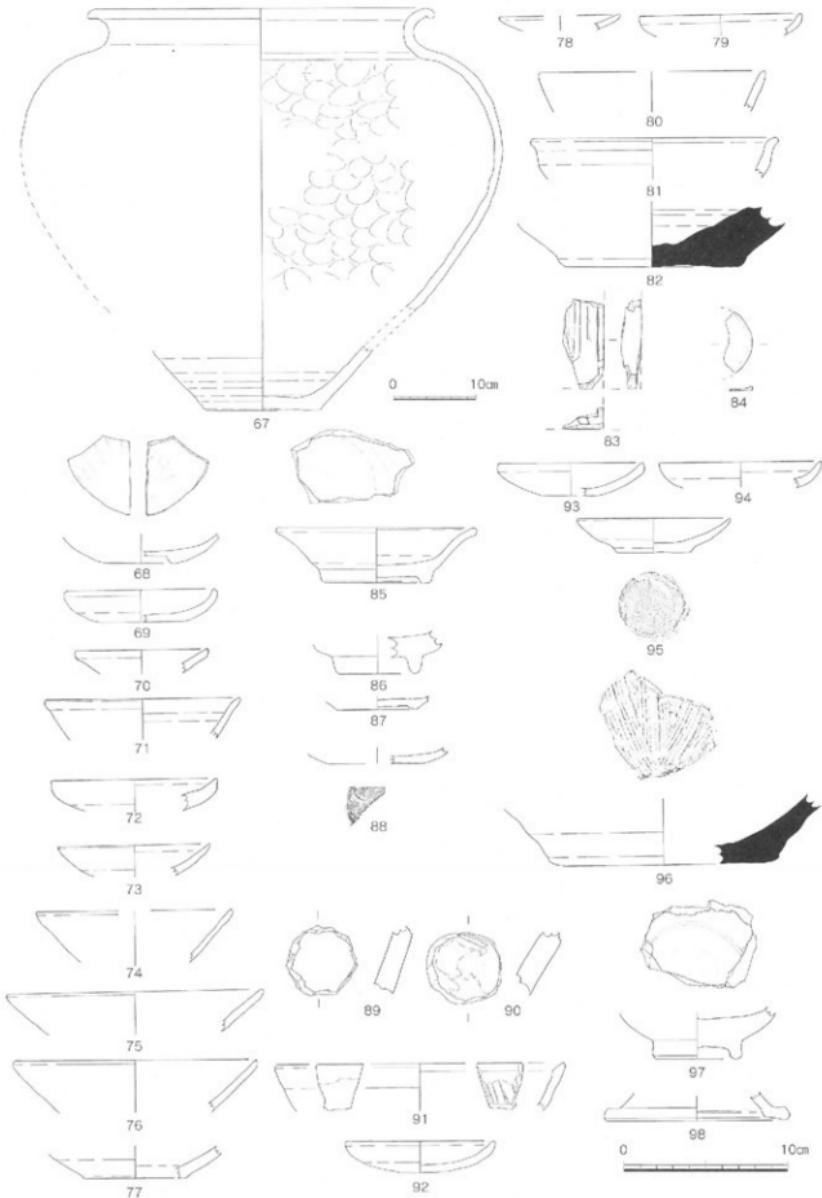


第24図 B区 SB23、SA12、SA13平面図・土層断面図 (S-1/80)



第25图 B区 SB24平面图·土层断面图 (S=1/80)





第29図 中世遺物 (S=1/3)

たる。鳥が2羽内側に向かって飛んでいる。1994年度(平成6年度)に富樫館跡の堀跡より出土したものとの同類型のもので、室町時代後期のものと思われる。SD05からは15世紀後半~16世紀前半の青磁移花皿(85)、14世紀~15世紀の青磁碗(86)が出土している。

SD07からは人窓期⁹の前半にあたる瀬戸美濃の後皿(87)と後IV古にあたる瀬戸美濃縁袖小皿(88)、円盤状陶製品(89・90)、後IV古にあたる瀬戸美濃御皿(91)、SD10からは上師皿(92)が出土している。包含層からは、上師器皿(93・94・95)が出土しており、(95)は底部に糸切り痕が確認できる。その他に珠洲摺鉢(96)、15世紀代の青磁碗(97)、瀬戸美濃の瓶子(98)が出土している。

第5節 近世以降の遺構と遺物

(1)溝 (SD04, SD05, SD07, SD10)

遺構

SD04(第30図、写真図版9)B区に位置し、東西に流れる遺構である。幅約60cm~1.8m、深さ約3~34cmで、東側で二股に分かれ。A区では溝の延長を遺構で確認することはできなかつたが、土層断面で確認することができた。

SD05 SD04と重複して位置し、並行する形で東西に伸びるがB区中央付近で確認できなくなる。覆土がSD04と同色であることから、切り合いをもつだけで時期差がほとんどないか、同一遺構になるかもしれない。

SD07(第31図、写真図版9)B区で検出した。若干蛇行するが東西に流れる溝である。幅約90cm~3m、深さは10~27cmを測る。SD04同様、A区では溝の延長を確認することができなかつた。これは東側の標高が高かつたためと思われ、流路が東から西へ向かっていたことが見える。

SD10(第32図、写真図版10)B区南西隅で確認された南北に走る溝である。幅約90cm~1.7m、深さ9cm~47cmを測る。覆土に小礫を含む砂層が確認できることから水路として機能していたようである。

遺物 (第33図、写真図版15)

SD04からはコンニャク印判で押された18世紀前半の肥前碗(99)、17世紀後半の肥前碗(100)、18世紀後半~19世紀初頭の肥前の筒碗(101)、18世紀代の伊万里の猪口(102)、19世紀代の再興九谷の瓶(103)、近世後半の皿(104)、19世紀以降のものと思われる棟瓦(105)、ガラス製の管(106)が出土した。

SD05からは、18世紀末~19世紀初頭の伊万里の碗(107)が出土した。

SD07からは、17世紀後半~18世紀前半の蛇の目釉剥ぎの皿(108)、17世紀前半の初期伊万里の碗(109)、17世紀後半で蛇の目釉剥ぎの施された波佐見の皿(110)、18世紀後半以降のものと思われる肥前の鉢(112)、18世紀前半の刷毛口唐津の碗(113)、小片であるため器種は明確でないが18世紀代の刷毛口唐津の鉢か碗(114)、17世紀前半の鉄釉の施された碗(115)、刷毛口唐津の火入れ(116)、17世紀前半の肥前の捕鉢(117)が出土した。

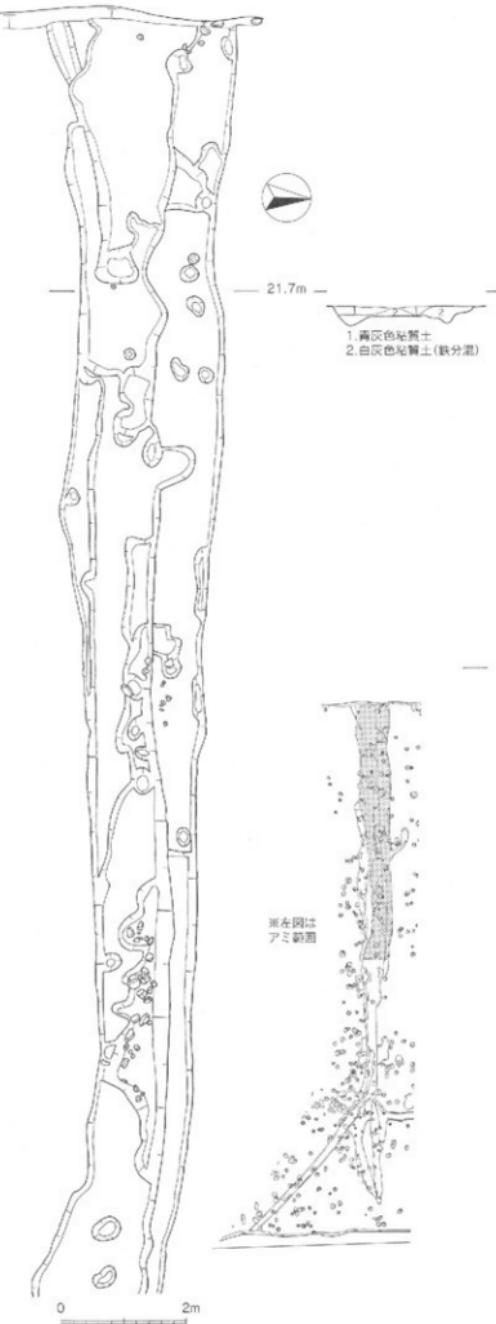
SD09からは18世紀後半のものと思われる肥前の碗(118)が出土した。

SD10からは伊万里の皿(119)、コンニャク印判が押された肥前の碗(120)が出土している。

包含層出土遺物 (第34図、写真図版15)

包含層からも17世紀前半の初期伊万里(122)、コンニャク印判の押された18世紀前半の肥前の碗(123・126)、19世紀代の再興九谷の碗(127)、19世紀代の再興九谷の皿(129)、大正期型紙摺の皿(136)等出土している。

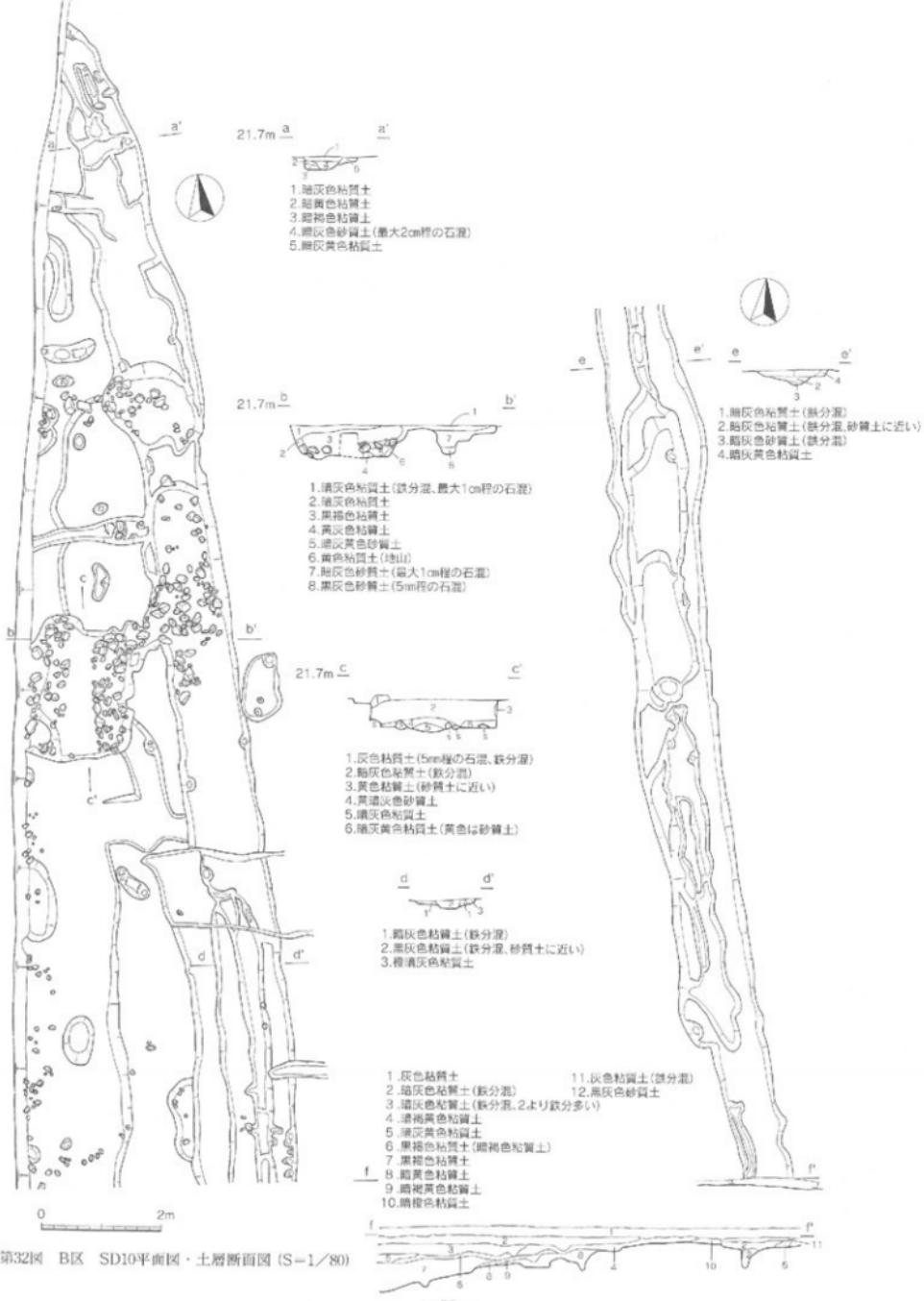
- (1) 古代土器の年代については、出嶋明人「古代土器編年軸の設定」「北陸古代土器研究の現状と課題」石川県考古学研究会1988による。
- (2) 瀬戸美濃の年代については藤澤良祐「古瀬戸をめぐる中世陶器の世界~その生産と流通~」「中世瀬戸窯の動態」勝瀬戸市埋蔵文化財センター1996による。



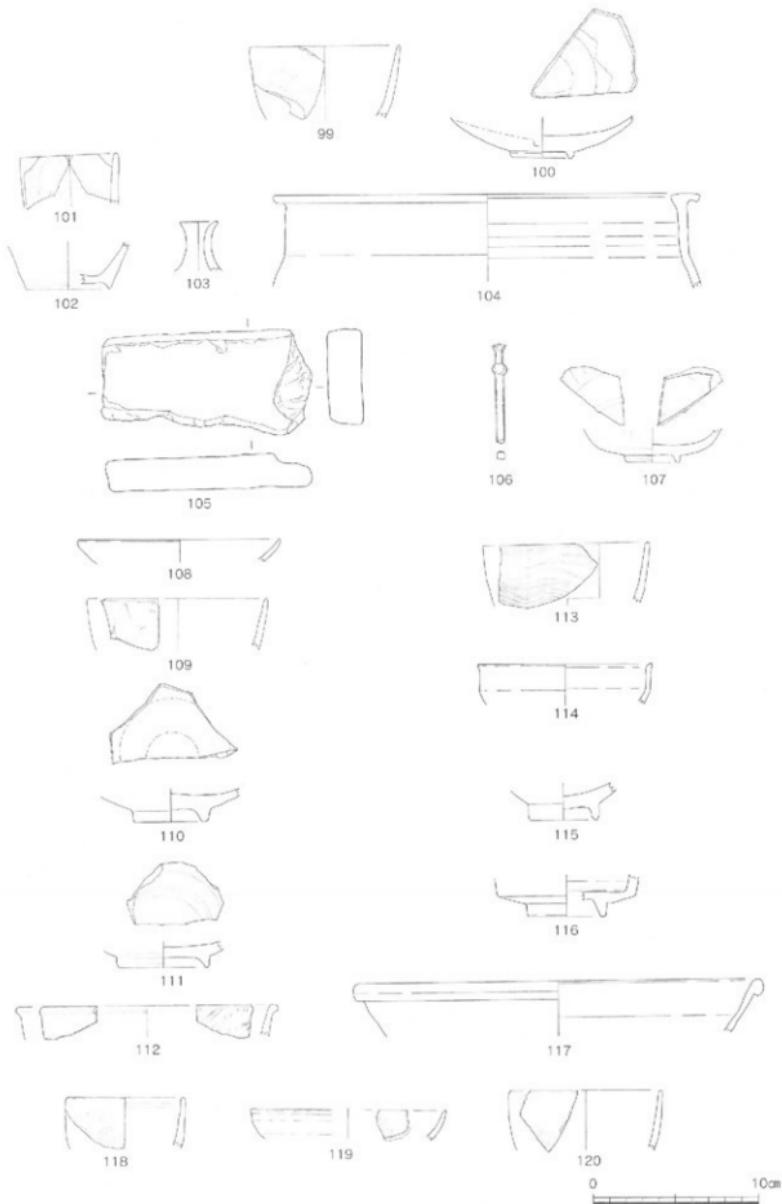
第30図 B区 SD04平面図・土層断面図 (S=1/80)



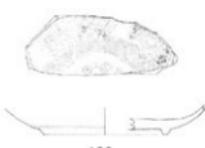
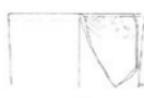
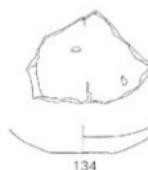
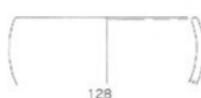
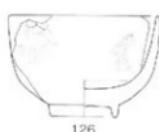
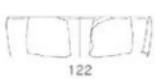
第31図 B区 SD07平面図・土層断面図 (S=1/80)



第32図 B区 SD10平面図・土層断面図 (S=1/80)



第33図 近世遺物 (S=1/3)



0 10cm

第34図 近世・近代遺物 ($S=1/3$)

第2表 土ヤグラダ遺跡遺物観察表

45	古代	SI01	土師器 甕	22.6	-	1/6	にぶい根 にぶい根	砂礫、石英	細葉(18.6mm)、 (ナード体強く残る)	
46	古代	SI01	土師器 甕	20.4	-	1/12	にぶい根 外形より(裏)	砂礫、赤色粒	砂礫、赤色粒	調査外、内、ロクロナデ 手取川
47	古代	SI01	土師器 甕	22.0	-	1/9	にぶい根 にぶい根	砂礫、白色粒	砂礫、白色粒	調査外、内、ロクロナデ 手取川
48	古代	SI01	土師器 甕	23.4	-	1/9	にぶい根 にぶい根	砂礫、赤色粒	砂礫、赤色粒	調査外、内、スズメウサ 内チヌのちカキ貝、内スズメウサ
49	古代	SI01	土師器 甕	22.4	-	1/18	にぶい根 にぶい根	砂礫、白色粒	砂礫、白色粒	調査外、内、ロクロナデ、基部調 査外、内スズメウサ
50	古代	SI01	土師器 甕	25.2	-	1/6	にぶい根 にぶい根	砂礫、白色粒	砂礫、白色粒	調査外、内、ロクロナデ、基部調 査外、内スズメウサ
51	古代	SI01	土師器 甕	28.0	-	1/18	にぶい根 明褐色灰	砂礫、白色粒	砂礫、白色粒	調査外、内、ロクロナデ、基部調 査外、内スズメウサ
52	古代	SI01	土師器 甕	32.6	-	1/18	にぶい根 1/2口(詰詰)	砂礫、白色粒	砂礫、白色粒	調査外、内、ロクロナデ、基部調 査外、内スズメウサ
53	古代	P01	土師器 甕	12.0	2.8	6.0	にぶい根 1/2口(詰詰)	砂礫、白色粒	砂礫、白色粒	調査外、内、ロクロナデ、基部調 査外、内スズメウサ
54	古代	P02	土師器 甕	17.2	-	1/18	にぶい根 前溝	砂礫、黑色粒	砂礫、黑色粒	調査外、内、ロクロナデ、基部調 査外、内スズメウサ
55	古代	P03	須恵器 壺	11.4	-	1/9	灰	灰色	砂礫	調査外、内、ロクロナデ、基部調 査外、内スズメウサ
56	古代	SD02	須恵器 壺	-	1.4	8.2	灰	灰色	砂礫	調査外、内、ロクロナデ、基部調 査外、内スズメウサ
57	古代	SD07	須恵器 壺	-	-	6.0	2.9	棕色	砂礫	調査外、内、ロクロナデ、基部調 査外、内スズメウサ
58	古代	SD09	須恵器 壺	-	13.8	1/12	灰白色	灰色	砂礫	調査外、内、ロクロナデ、基部調 査外、内スズメウサ
59	古代	SD09	須恵器 壺	-	13.0	5/36	灰白色	灰色	砂礫	調査外、内、ロクロナデ、基部調 査外、内スズメウサ
60	古代	SD10	須恵器 壺	-	6.6	1/6	灰白色	灰色	砂礫	調査外、内、ロクロナデ、基部調 査外、内スズメウサ
61	古代	SD11	須恵器 壺	-	8.8	1/6	にぶい根 にぶい根	砂礫、赤色粒 浅褐色	砂礫、赤色粒 浅褐色	調査外、内、ロクロナデ、基部調 査外、内スズメウサ
62	古代	SD12	須恵器 壺	-	1.8	16.0	1/12	にぶい根 にぶい根	赤色粒、砂礫	調査外、内、ロクロナデ、基部調 査外、内スズメウサ
63	古代	SD13	須恵器 壺	-	19.8	-	1/18	棕色	棕色	調査外、内、ロクロナデ、基部調 査外、内スズメウサ
64	古代	SD14	須恵器 壺	-	20.0	4.3	-	1/7	棕色	調査外、内、ロクロナデ、基部調 査外、内スズメウサ
65	古代	SD15	須恵器 壺	-	4.0	1/12	にぶい根 にぶい根	赤色粒、砂礫	赤色粒、砂礫	調査外、内、ロクロナデ、基部調 査外、内スズメウサ
66	古代	SK02	須恵器 壺	28.2	-	-	1/12	にぶい根 にぶい根	赤色粒、砂礫	調査外、内、ロクロナデ、基部調 査外、内スズメウサ
67	中世	SD03	中國焼 土燒器	42.6	49.5	14.6	深灰色、灰	灰色	砂礫	調査外、内、ロクロナデ、基部調 査外、内スズメウサ
68	中世	SD08	中國焼 土燒器	9.0	2.0	2.5	0.4	明オリーブ灰 にぶい黄褐色	砂礫、赤色粒	調査外、内、ロクロナデ、基部調 査外、内スズメウサ
69	中世	SD09	中國焼 土燒器	-	-	-	1/2	にぶい黄褐色	砂礫、赤色粒	調査外、内、ロクロナデ、基部調 査外、内スズメウサ

70	中世	P05	土師器	皿	8.2	1.45	-	1/9	にふい黄褐色	砂礫	11頭調査盤外、内：ロクロナデ、体部 調査盤外、内：ロクロナデ
71	中世	P06	漁丁美观	天目茶碗	12.0	2.5	-	1/12	黒褐色	砂礫、黑色粒	頭部調査盤外、内：ロクロナデ、体部調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ
72	中世	P07	土師器	皿	10.2	1.9	-	1/6	にふい黄褐色	砂礫	頭部調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ
73	中世	SX01	土師器	皿	9.4	-	-	1/3	にふい黄褐色	砂礫、差色豆状斑点	頭部調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ
74	中世	SX01	土師器	皿	-	-	-	-	にふい黄褐色	砂礫、赤褐色、浅黃褐色	頭部調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ
75	中世	SX01	土師器	皿	15.8	-	-	2/9	にふい黄褐色	砂礫、赤褐色	頭部調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ
76	中世	SX01	土師器	皿	15.0	-	-	2/9	にふい黄褐色	砂礫、赤褐色	頭部調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ
77	中世	SX01	土師器	皿	-	-	6.2	1/18	灰黄褐色	砂礫、赤褐色	頭部調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ
78	中世	SD04	土師器	皿	-	1.1	-	-	浅黄褐色	砂礫、赤褐色	頭部調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ
79	中世	SD04	白磁	皿	10.0	1.3	-	1/12	灰白色	砂礫、赤褐色	頭部調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ
80	中世	SD04	青磁	皿	-	-	6.2	オリーブ灰色	オリーブ灰色	黑色粒	頭部調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ
81	中世	SD07	青磁	皿	15.0	-	-	1/36	オリーブ灰色	黑色粒	頭部調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ
82	中世	SD04	麻柄焼	兜か?	-	-	10.6	1/3	灰色	灰白色	頭部調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ
85	中世	SD06	青磁	皿	12.4	3.4	6.6	6/2	オリーブ灰色	砂礫、黑色粒、赤色粒	頭部調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ
86	中世	SD06	青磁	皿	-	4.6	1/3	青褐色	青褐色	黑色粒	頭部調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ
87	中世	SD07	青磁	小皿	-	1	5.0	7/18	にふい黄褐色	砂礫、砂礫、黑色粒	頭部調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ
88	中世	SD07	漁丁美观	深物小皿	-	-	-	-	灰黄色	砂礫、白色粒	燒成：器、自然釉り器
89	中世	SD07	延前	円錐状 陶製品	-	-	-	小片	にふい黄褐色	砂礫、白色粒	燒成：器、経塗付経糸し、
90	中世	SD07	桶前	円錐状 陶製品	-	-	-	小片	自然(自然釉)	砂礫	燒成：器、自然釉り器
91	中世	SD07	漁戸美观	鉢皿	17.8	-	-	1/18	浅黄色	砂礫	焼地：板法、頭部調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ
92	中世	SD10	土師器	皿	9.2	1.9	-	5/9	にふい黄褐色	砂礫、赤褐色	焼地：板法、頭部調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ
93	中世	包含層	土師器	皿	9.2	2.0	-	1/6	にふい黄褐色	砂礫、赤褐色	焼地：板法、頭部調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ
94	中世	包含層	土師器	皿	10.0	1.6	-	1/9	にふい黄褐色	砂礫	焼地：板法、頭部調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ
95	中世	包含層	土師器	皿	9.4	2.1	5.0	1/3	にふい黄褐色	赤褐色	焼地：板法、頭部調査盤外、内：ロクロナデ、全体調査盤外、内：ロクロナデ
96	中世	包含層	沫網焼	招絆	-	-	13.0	1/6	灰色	砂礫、赤褐色	燒成：器、自然釉り器
97	中世	包含層	青磁	皿	-	-	5.0	1/2	灰オリーブ色	砂礫、黑色粒	燒成：器、自然釉り器
98	中世	包含層	漁戸美观	盤子	-	-	11.4	1/7	灰白色	砂礫	燒成：器、自然釉り器

99	近世	SD04	伊万里 肥前	瓶	9.2	—	—	灰白色	灰白色	黑色	黑色	コンニャク目判
100	近世	SD04	伊万里 肥前	瓶	—	—	3.8	2.9	浅黄色	砂糖、黑色粒	蛇の目物調さ	
101	近世	SD04	伊万里 肥前	猪口	6.0	—	—	灰白色	灰白色	黑色粒	蛇の目物調さ	
102	近世	SD04	伊万里 肥前	猪口	—	—	5.0	2.9	灰白色	黑色粒	外面の物が剥がれ落ちている	
103	近世	SD04	伊万里谷	瓶	2.6	—	—	暗オリーブ色	暗オリーブ色	砂糖、黑色粒	砂糖、黑色粒	
104	近世	SD04	伊万里谷	瓶	—	—	—	1.9	浅黄色	黑色	黑色	砂糖、黑色粒
105	近世	SD04	伊万里	瓦	26	—	—	灰白色	灰白色	黑色	黑色	砂糖、黑色粒
107	近世	SD05	伊万里	碗	—	—	—	3.4	2.9	灰白色	砂糖、黑色粒	砂糖、黑色粒
108	近世	SD07	伊万里	碗	12.2	—	—	1/12	灰白色	砂糖、黑色粒	砂糖、黑色粒	砂糖、黑色粒
109	近世	SD07	伊万里	碗	11	—	—	1.9	明綠色	明綠色	明綠色	明綠色
110	近世	SD07	波佐見	皿	—	—	4.4	5.9	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色
111	近世	SD07	伊万里	碗	—	—	5.4	4.9	灰白色	灰白色	灰白色	灰白色
112	近世	SD07	伊万里	鉢	16	—	—	—	明青灰色	明青灰色	明青灰色	明青灰色
113	近世	SD07	芭翁	芭翁	10.2	—	—	—	暗赤灰色	暗赤灰色	暗赤灰色	暗赤灰色
114	近世	SD07	伊万里	鉢	10.8	—	—	—	1/9	4.5~5.5 灰白色	4.5~5.5 灰白色	4.5~5.5 灰白色
115	近世	SD07	伊万里	碗	—	—	4.0	1.9	—	砂糖	砂糖	砂糖
116	近世	SD07	伊万里	火入れ	—	—	4.6	1.9	灰黄褐色	砂糖	砂糖	砂糖
117	近世	SD07	伊万里	薬鉢	24.4	—	—	—	灰褐色	砂糖	砂糖	砂糖
118	近世	SD09	伊万里	碗	7.0	—	—	7/36	灰白色	砂糖	砂糖	砂糖
119	近世	SD10	伊万里	皿	—	—	—	—	灰白色	砂糖	砂糖	砂糖
120	近世	SD10	伊万里	瓶	9.4	—	—	—	1/18	灰白色	砂糖	砂糖
121	近世	包含層	伊万里	瓶	—	—	—	—	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色
122	近世	包含層	伊万里	碗	8.6	—	—	1/12	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色
123	近世	包含層	伊万里	瓶	9.0	—	—	1/6	灰白色	砂糖	砂糖	砂糖
124	近世	包含層	伊万里	瓶	9.4	—	—	—	灰白色	砂糖	砂糖	砂糖
125	近世	包含層	伊万里	碗	—	—	—	—	灰白色	砂糖	砂糖	砂糖
126	近世	包含層	伊万里	碗	9.0	6.2	4.0	1/3	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色
127	近世	包含層	伊万里谷	碗	10.0	—	—	—	灰白色	砂糖	砂糖	砂糖
128	近世	包含層	伊万里谷	碗	11.0	—	—	—	赤灰色	砂糖	砂糖	砂糖
129	近世	包含層	伊万里谷	皿	—	—	9.2	1/12	灰白色	砂糖	砂糖	砂糖
130	近世	包含層	伊万里	碗	13.4	1.8	—	1/18	灰白色	砂糖	砂糖	砂糖
132	近世	包含層	伊万里	碗	—	1.0	3.8	1/3	灰白色	砂糖	砂糖	砂糖
133	近世	包含層	伊万里	碗	—	2.2	6.8	1/9	浅青色	砂糖	砂糖	砂糖
134	近世	包含層	伊万里	皿	—	1.5	4.8	4.9	明オリーブ灰色	砂糖	砂糖	砂糖
					—	3.6	2/3	灰色	长色	白英、砂糖	白英、砂糖	白英、砂糖

石製品

135	近世	包含層	肥前	柄半圓	8.6	4.5	—	1/7	灰白色	明オリーブ灰	黑色粒	透明白
136	近代	包含層	肥前	柄半圓	—	—	7.6	1/3	灰白色	黑色粒	透明白	滑結、透明白

遺物 番号	時 期	出土地点	器 種	石 質	厚 さ (cm)	幅 (cm)	長 さ (cm)	重 量 (g)	備 考
19	绳文	SD01	打製石斧	安山岩	16.15	8.1	3.6	416	
20	绳文	SD04	打製石斧	火山噴氣灰岩	15.6	8.85	2.4	440	
21	绳文	SD04	打製石斧	安山岩	15.1	9.6	3.2	374	
22	绳文	SD06	打製石斧	火山噴氣灰岩	9.9	7.6	2.1	210	
23	绳文	SD07	打製石斧	火山噴氣灰岩	13.7	8.2	2.5	398	
24	绳文	SD08	打製石斧	ヒン岩	12.3	7.75	2.2	225	
25	绳文	SD10	打製石斧	細粒砂岩	11.8	6.9	2.1	220	
26	绳文	包含層	打製石斧	礁灰岩	8.2	4.1	1.4	60	
27	绳文	包含層	打製石斧	砂岩	18.5	5.35	2.15	190	
28	绳文	包含層	打製石斧	安山岩	10.25	6.0	2.3	148	
29	绳文	包含層	打製石斧	砂岩	9.4	6.1	3.2	290	
30	绳文	包含層	打製石斧	火山噴氣灰岩	10.7	7.2	19.5	220	
31	绳文	包含層	打製石斧	石英質安山岩	10.8	8.6	2.65	335	
32	绳文	包含層	打製石斧	礁灰岩	10.9	8.2	3.6	385	
33	绳文	包含層	打製石斧	安山岩	10.1	8.7	2.0	134	
34	绳文	包含層	打製石斧	安山岩	10.1	7.7	2.45	257	
35	绳文	包含層	打製石斧	砂岩	10.1	7.25	3.25	467	
36	绳文	包含層	打製石斧	火山噴氣灰岩	10.1	7.9	3.1	364	
37	绳文	SB1	打製石斧	安山岩	10.1	9.2	4.2	840	
38	古代	SH1	砾石	砾石	10.1	4.1	4.1	140	
83	中世	SH04	瓶	砂岩	10.1	2.55	1.2	17	高崎岸

金属・ガラス製品

遺物 番号	時 期	出土地点	器 種	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 量 (g)	備 考
84	中世	SD04	鏡	2.2	1.75	0.3	2.0	銅鏡
106	近世	SD04	鏡	6.2	0.5	0.5	5.0	ガラス製

第4章　まとめ

縄文時代の遺物は包含層より出土したものが多く、そのほとんどが小片であった。時期が確認できたものでは、縄文晚期後葉のものが数点あった他は縄文後期中葉のものであった。

古代では竪穴建物1棟を検出している。遺物は8世紀中頃～9世紀初頭が主体となる。東南隅にカマドを有していることから、居住の施設であったことが窺える。古代の竪穴建物跡は当遺跡付近から西方面の遺跡ではあまり見られず、富樫館跡鬼ヶ塗地区・富樫館跡廻土居地区（野々市町教育委員会2001）では竪穴建物跡は確認されていない。東南に150m程離れた野々市町調査の扇が丘ハイゴク遺跡（未報告）では数棟の古代の竪穴建物跡が確認されており、当遺跡から東方向に集落が存在するようである。

中世では掘立柱建物跡14棟、柱列を伴う掘立柱建物跡10棟、土坑2基、溝を確認している。確認された掘立柱建物跡のうち、SB03、SB04（調査区外のため規模が確認できなかつた）、SB05、SB07以外で梁行2間以上のものはすべて矩柱建物である。24棟の建物のうち南北棟は13棟、東西棟3棟、どちらとも認められないもの8棟（調査区外に延びるため確認できなかつたもの5棟を含む）と南北棟が多い。建物規模も南北棟が 2×2 間2棟、 2×3 間6棟、 2×4 間3棟、 2×5 間1棟、 3×5 間1棟であるのに対し、東西棟は 1×2 間2棟、 1×3 間1棟とすべて梁行1間の建物で、本遺跡では南北棟に比較的大きな建物を建てていたようである。建物跡は数棟切り合っていることから、建て替えがあつたと思われ、遺物から12世紀中頃～13世紀初頭の時期にあたるものと考えられる。遺跡の性格については遺物が少なく、明確に提示できないか、集落遺跡と想定する。

先述した扇が丘ハイゴク遺跡でも中世の遺構、遺物が確認されている。遺跡の時期は12世紀後半～13世紀中頃であると思われ、その中でも東南方向に向かうに従って新しい時期の遺構、遺物を確認している。後述する1992年度調査報告分の扇が丘ヤグラダ遺跡は小面積であるが11世紀前半が主体となる遺跡であり、見通しとして、北（1992年度調査扇が丘ヤグラダ遺跡）から南（1997・1998年度調査扇が丘ヤグラダ遺跡）、そして東南（扇が丘ハイゴク遺跡）方向への集落の変遷があつたことを指摘できよう。

近世ではB区で確認したSD04・SD07・SD10の溝3条が主要な遺構としてあげられる。A区では、遺構面のレベルが高いことから表土除去の際に近世遺構である溝を同時に削平してしまい、SD04、SD07は検出することはできなかつた。

この3条の溝は旧地籍図（第35図）において確認することができる。周辺は水田となっていることから3条の溝は水田の用水であったと判断され、レベルから、これらの溝は九艘川に向かって流れていたようである。地籍図を確認するとSD04の途中二股に分かれる特徴が見てとれる。またSD04は1998年度発掘調査を行っている富樫館跡廻土居地区的SD02の続きをとることが確認される。出土遺物も18世紀～19世紀代のものが多いことから、SD04は富樫館跡廻土居地区報告のとおり少なくとも18世紀後半頃まで遡ることができよう。ただ、廻土居地区報告のSD02の分流である本遺跡のSD07は17世紀前半の遺物が比較的多く見られることから、SD07が他溝よりもさらに古くから機能していた可能性があり、その場合、SD04の機能時期が若干遡る可能性があることを留意せねばなるまい。

おわりに、本報告書において、掘立柱建物跡を全て中世の遺構として報告したが、相対的に遺物量が少なく時期を十分に検討することができなかつたところがある。ただ、周辺遺跡を含めて集落の変遷を確認できたことは一つの成果であるといえよう。

参考文献

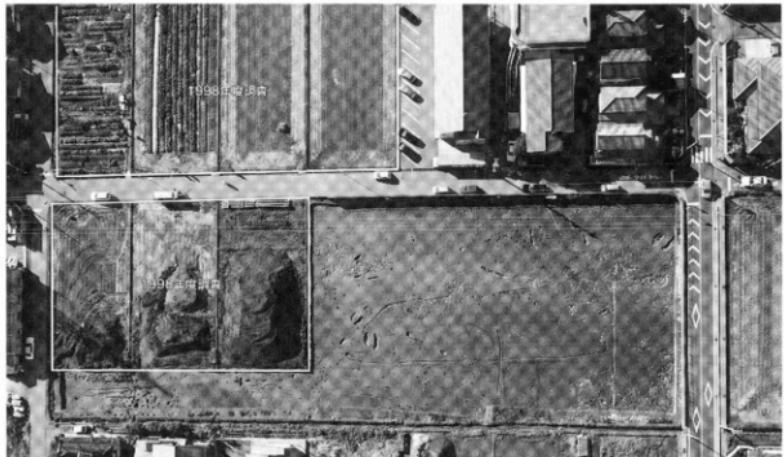
- 布尾 和史 徳野 裕子 2001 「富樺館跡城下居地区・富樺館跡鬼ヶ塗地区」 野々市町教育委員会
小林 秀三 1987 「三木だいもん遺跡」 加賀市教育委員会
第6回北陸中世土器研究会 1993 「中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり」 北陸中世土器研究会
吉岡 康暢 1994 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館



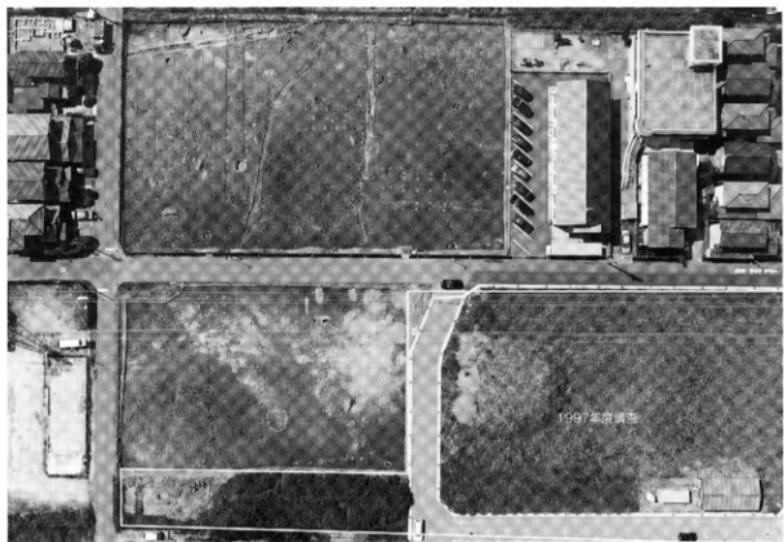
第35図 旧地籍図と調査区(明治40年製に加筆)



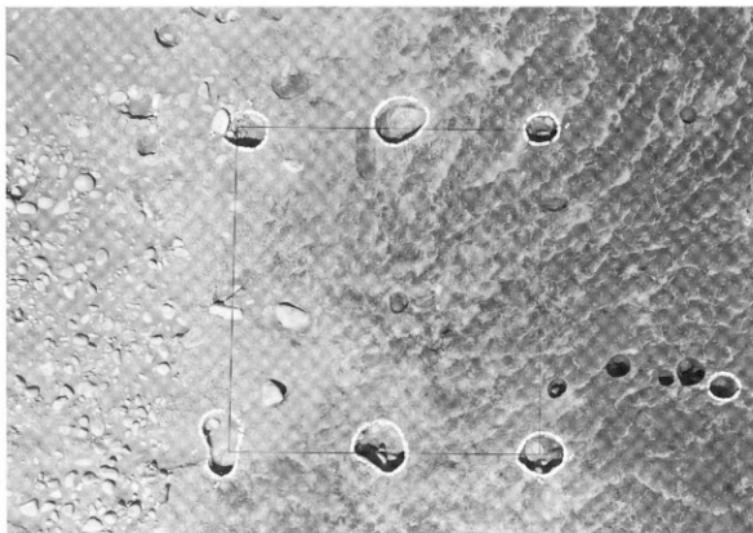
調査区遠景(扇が丘住吉地区面整理事業により、過去に行った発掘調査地含む)（北西から）



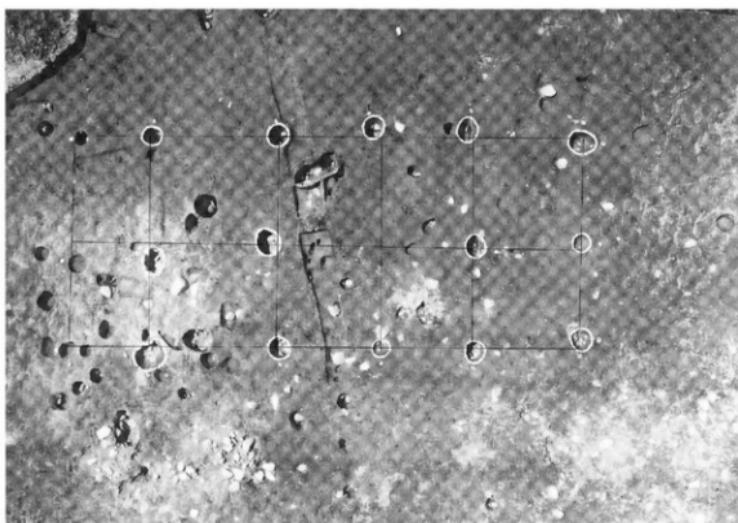
調査区近景 (1997年度調査)



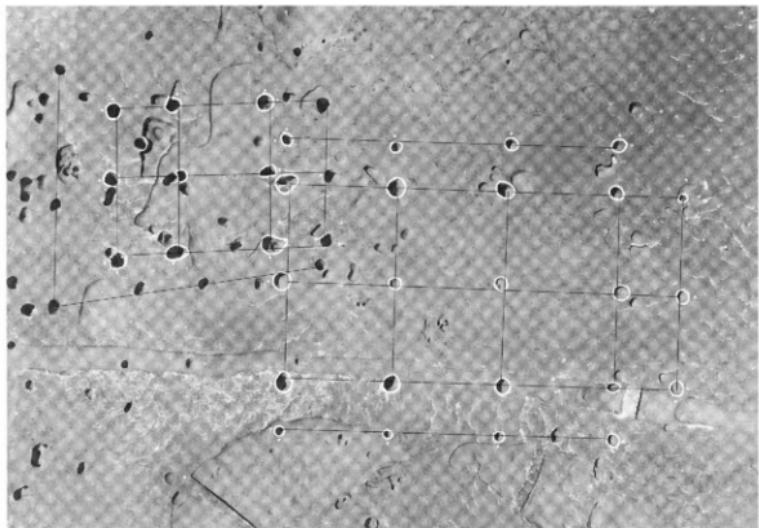
調査区近景 (1998年度調査)



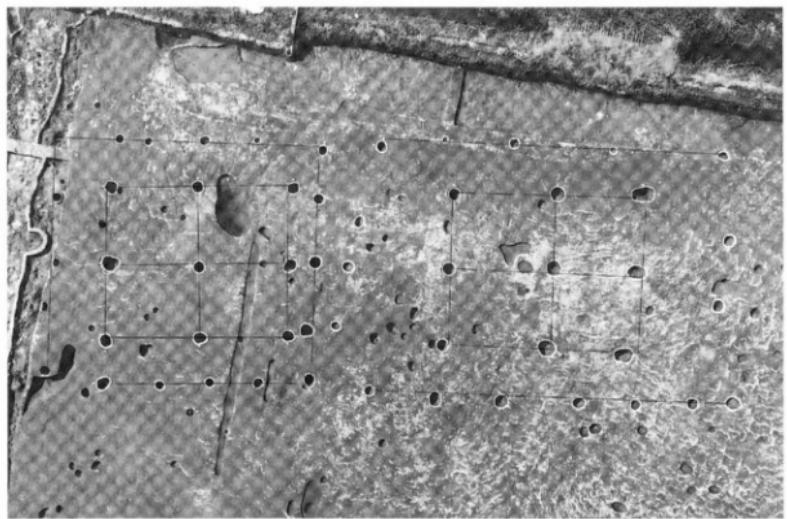
SB07



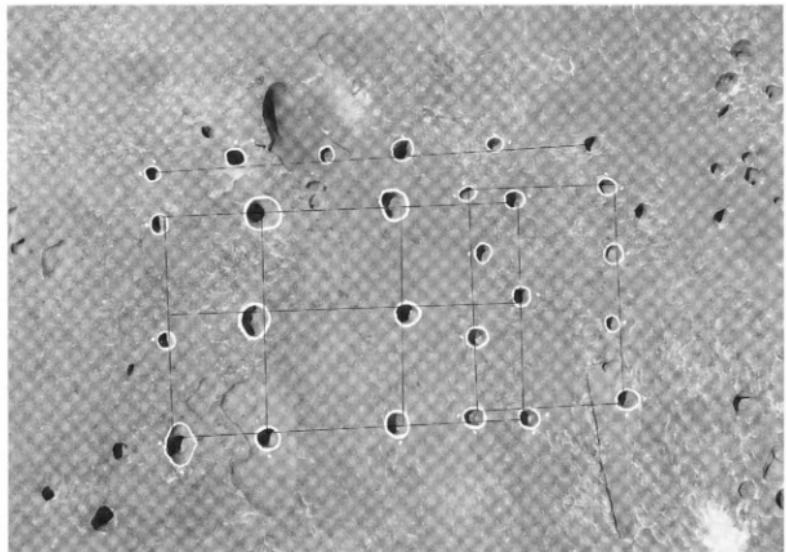
SB13



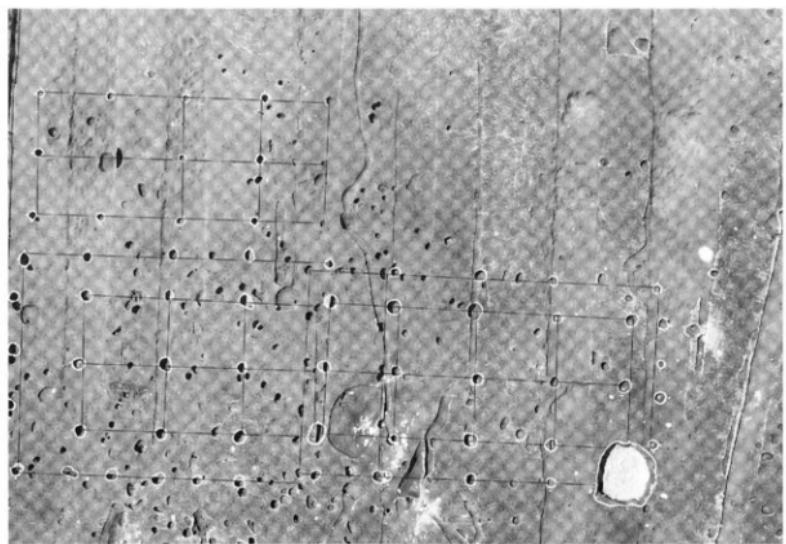
SB16 · SB17 · SA04 · SA05 · SA06



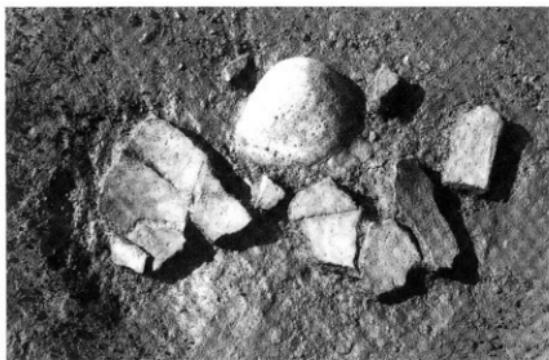
SB18 · SB19 · SA07 · SA08 · SA09



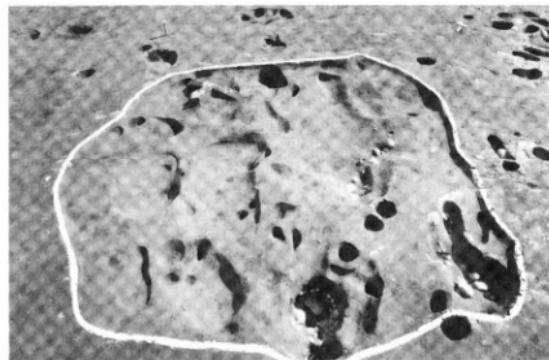
SB20 · SB21 · SA10



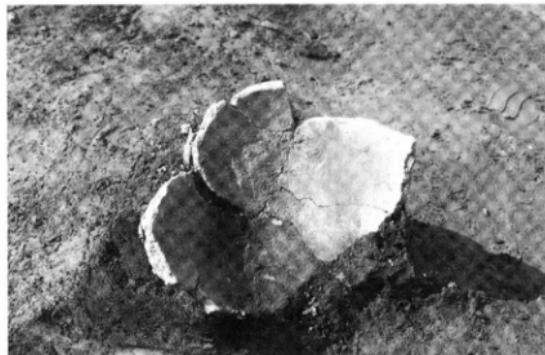
SB22 · SB23 · SB124 · SA11 · SA12 · SA13



縄文土器出土状況
(A区北側包含層より出土)



S101 (北から)



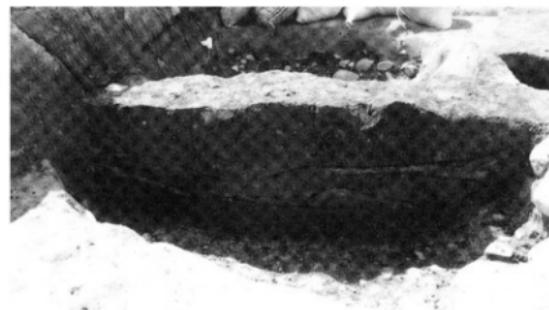
S101出土遺物 (土師器底)



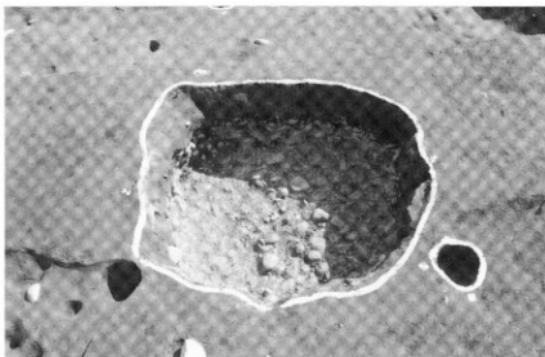
SK01



SK01断面（西から）



SK01断面（北から）



SK02 (北から)



SK02断面 (南から)



SK02出土遺物 (珠州焼甕)



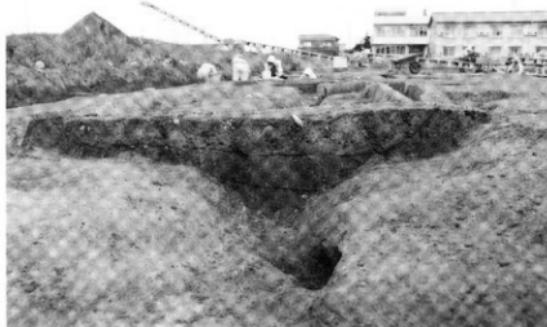
SD04 (東から)



SD07 (東から)



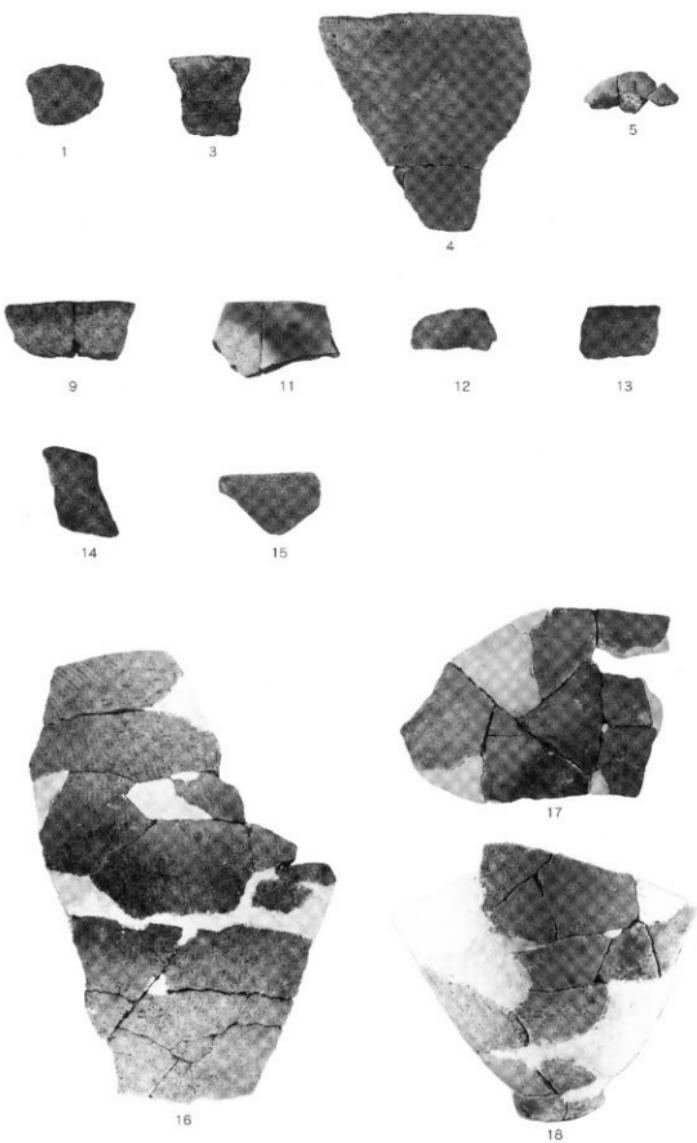
SD10 (南から)



SD10断面 (南から)



SD10～被部断面 (北から)





19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



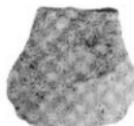
30



31



32



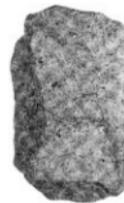
33



34



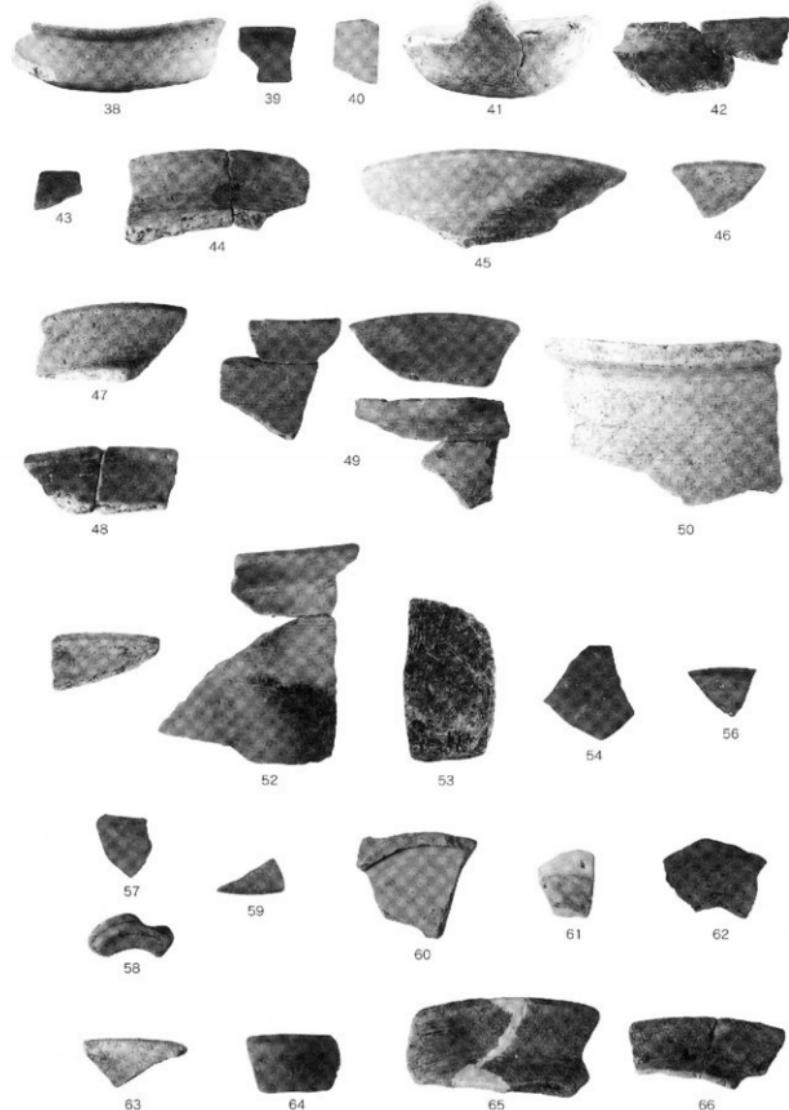
35

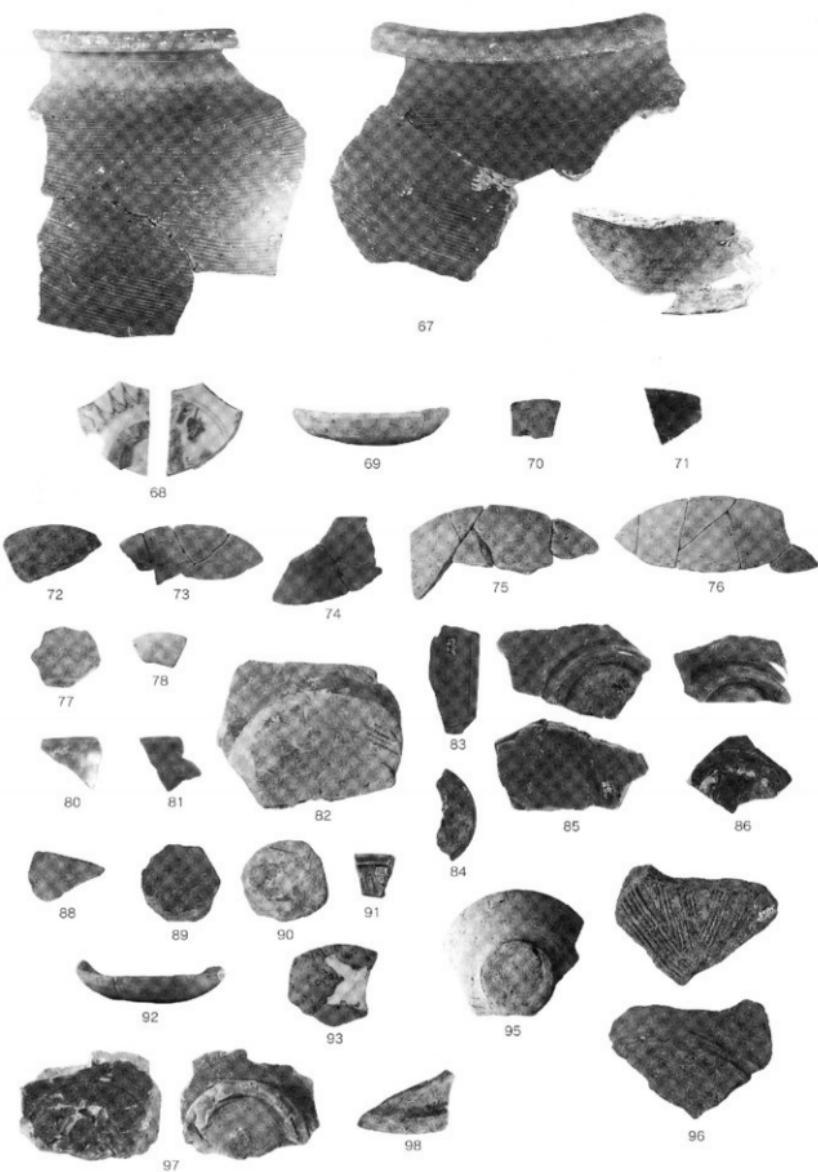


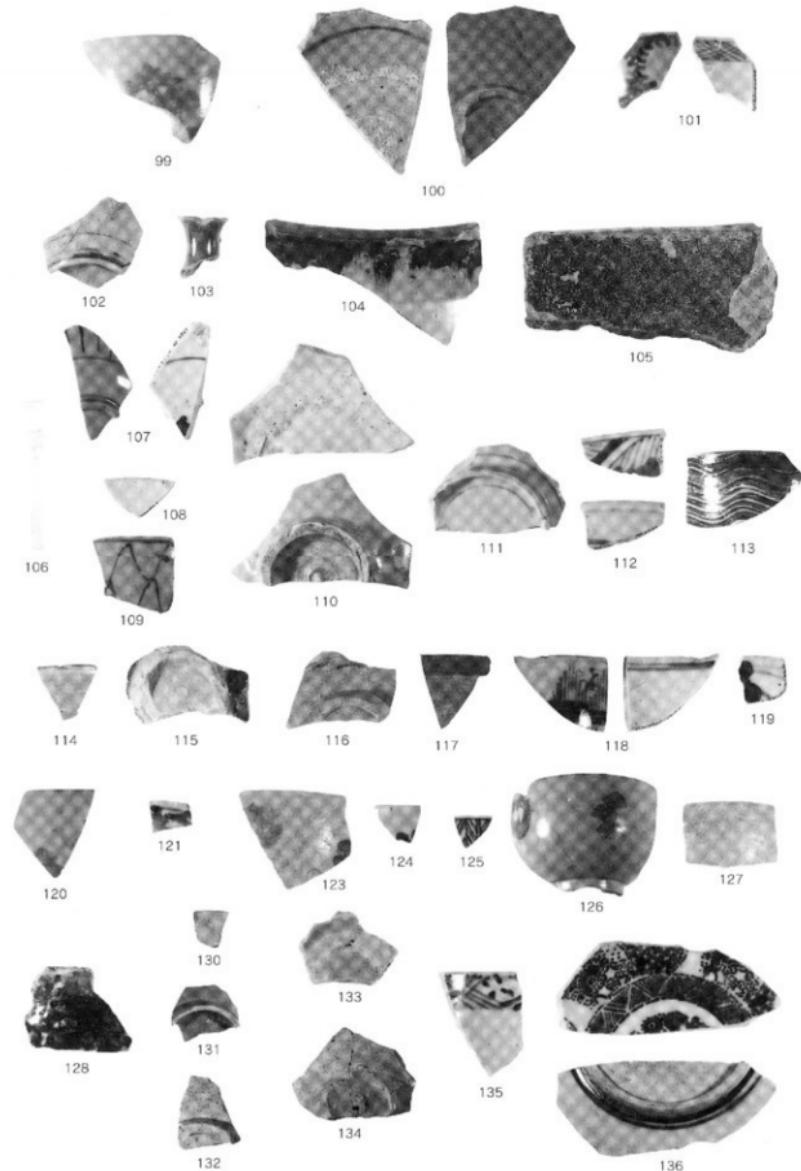
36



37







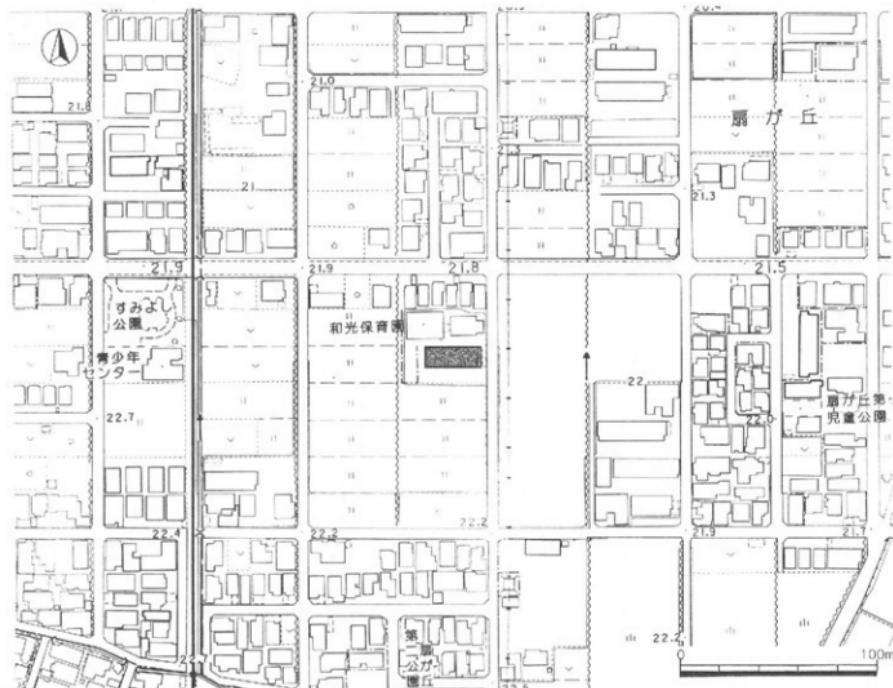
平成4年度 発掘調査報告

第1章 経緯と経過

本遺跡のある扇が丘周辺は近隣にある金沢工業大学を中心に店舗や集合住宅の建設が進行している。特に1990年代に入ってからは小規模な開発行為が連続と続き、本遺跡の西方約100mにある富樫館跡は年間1~2件の発掘調査が継続的に行われてきた。

本遺跡の調査原図も集合住宅の建設に伴うもので、平成3年9月上旬、野々市町教育委員会に照会があった。教育委員会は開発地近辺に富樫館跡を中心とする遺跡が集中していることから同月10日小型掘削機による試掘調査を行った。開発予定地内を3箇所開けた結果、開発地全般に遺跡が存在することが判明し、教育委員会と開発原因者との間で協議をおこなった。協議の結果、開発地の集合住宅建設予定地の箇所のみを発掘対象とし、その他は盛土造成によって遺跡を保護することで合意し、同年9月21日~10月2日の2週間、約360m²の面積を調査した。

遺物整理は平成4年9月~10月と、翌5年9月に行われた。



第1図 調査区位置図 (S-1/2,500)

第2章 遺構と遺物

SB1 (第3図)

調査区北東に位置する5間×3間以上の掘立柱建物である。建物は南面庇をもった総柱式で北方は調査区外へとのびる。柱間はA-Bについては2.5m前後を測るが、庇にあたるB-Cの柱穴間は2m程の距離しかもない。柱穴は直径40~60cmの円形をし、深さは地表面から30~60cmを測る。また、Cラインの穴は、A、Bラインの穴よりも一回り小さい。ピット4・5・7・12は深さ10cm前後のテラスをもっている。なお、西端の柱穴16~18は直徑30cmと他の柱穴と比較して規模が小さく、軸が西に6度傾いていることから棚列など別の構造物の可能性もある。

出土遺物は1~9の土師器碗、皿である。ピット8・11・13・14・15から出土している。いずれも柱穴内の中から上層にかけて見つかっており、1箇所の穴から1個ないし2個埋まっていた。1~4及び7は碗で5・6・8・9は皿である。1~4は体部を意図的に打ち欠いた形跡をもつ。これらの遺物は建物の廃絶に対する祭祀遺物と捉えたい。また、2の碗は外底面中央に直徑1.2cm、深さ6mmの孔が開いている。この他、P11からは炭化木片が多数出土した。

SK1 (第4図)

調査区北東隅にある。形状は北半分が方形、南半分が球形に近い形状をしている。南北に長く、長辺180cm、短辺80cm、最深部58cmで、3段のテラスを有している。テラスの深さは各々8cm、30cm、40cmを測る。南東に最長40cm・深さ5cmと南西に最長80cm・深さ6cmの浅い落ちこみが切り合っているが前後関係は不明である。穴内から土器は見つかっていないが、最深部から樹木の皮のようなものが検出された。この土坑は後述する崩溝SD1のほぼ真ん中に位置することから、SK1とSD1は同時併存していたとも考えられる。これらの遺構の性格についてはよくわからない。

SK2 (第4図)

SK1の南東側に隣接する。土層断面からSD1が埋まってから使用され、SB1が建てられる前にその役割を終えている。プランは北西—南東間が長い直な長方形である。長軸185cm、短軸120cm、深さ約15cmを測る。

遺物は10の土師器碗1点が出土している。

SK3 (第5図)

調査区南東隅に存在する。穴の一部が調査区外へのびるため、調査区を拡張して全容を明らかにした。基本プランは長方形であるが、一部不定形な形状をする。西から南側には深さ5cm程度のテラスを一段もつ。大きさは南北を長軸として150cm、東西を短軸として120cm、深さは最も深いところで15cmと浅めである。土層は黒灰粘質土の1層のみで、中から11~24の土師器が大量に出土した。

11~20は碗、21~24は皿で、15は有台碗である。19と20は柱状高台で、体部は意図的に打ち欠いているようである。碗、皿とも外底部は磨耗で不明なものを除けばすべて回転系切りである。

SK4 (第6図)

SK3から西へ4m進んだところにある土坑である。亞な長方形をしたプランで、北東—南西を長軸とする。穴内には5cmと10cmの深さをしたテラスがいくつも見られる。長軸260cm、短軸220cm、深さ約20cmを測る。

覆土から25~37の土師器や52~57の鉄釘、炭化物が出土した。出土地点は穴の壁側に集中していた。SK3と比較して土器の残存はあまりよくない。25~30は碗、31~34は皿と思われる。29、30、35、36は意図的に体部を削っている。確認できる外底部はすべて回転系切りである。25の口縁端部には灯明板が見られる。31の内面には茶褐色した皮膜が残っている。35の外底面のほぼ真ん中には直徑約1cm、深さ約5mmの孔が開いている。炭化物は長さ5cm前後、直徑2cm弱の木片で、上層を検出した黒灰粘質土の覆土から大量に出土した。鉄釘は錆の発達が著しい。52~54は欠損している。55~57は木に打ちつけたようで、彫曲した状態となっている。

SD 1 (第4図)

調査区北東隅に位置する。幅36~70cm、深さ10~15cmで、円周状に巡り、北側の一部は調査区外にのびる。周溝内の大きさは東西4m(①からの長さ)、南北3.5m以上を測る。また、西側には幅30~40cm、深さ5~10cmの溝②が溝①の東となりに平行に走り、南側で合流する。溝②の周溝内の大きさは東西3.5mで、切り合いから②の方が当初に掘られたことが判明した。このことからSD1は全長3.5mの大きさから後に西方に50cm程拡張したことが明らかとなった。この周溝内の中央にあるSK1はこの溝と共存する可能性をもつ。

溝理上から38、39の土師器片を確認した。

SD 2

SB1西端から派生し、そのまま西方に12m程進み、北方に向きを変え調査区外にのびる。幅は40~50cmであるが所々で30cmに狭くなったり70cmに広くなったりする。深さは5~10cmと浅い。南北方向の箇所では切り合いの痕跡が見られ、掘り直しをしたと思われる。

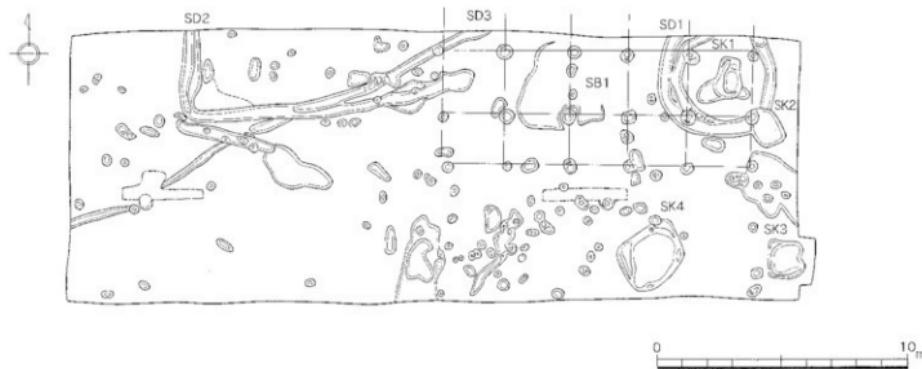
SD 3

調査区中央の北端から南北方向に向かって走り、西側調査区に抜けていく。SB1北西隅の柱穴と切りあっており、SD3が埋まった後SB1が建てられたようである。幅は15~30cm、深さは5cmと極めて浅い。各所で途切れているところがあるが、本来は続いていると思われる。切り合いからSD2の方が新しいことが判明した。

包含層

黄褐色粘質土の地山の上に堆積する黒灰色粘質土が包含層にあたる。包含層より上は現在の水田層と整地層(床土)がのっており、基本土層は極めて単純である。

40~51の遺物を確認した。40と41は土師器碗である。41は完形品に近く、地山直上で検出した。42~46は碗、47と48は柱状高台の皿の底部である。42、43、47、48は意図的に体部を外した可能性をもつ。49は青磁碗の口縁部である。50は近世の甕である。51は繩文晩期の深鉢の体部片である。



第2図 遺構全体図 (S=1/200)

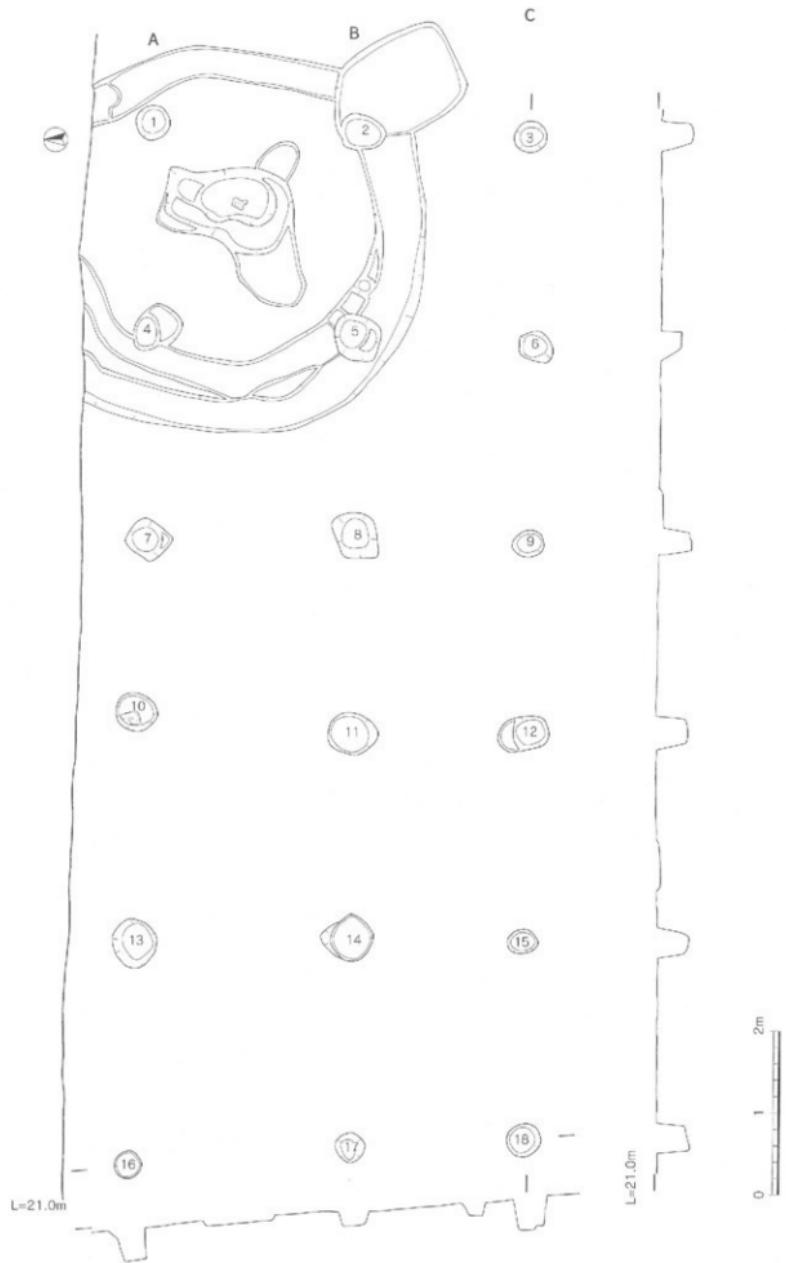
第3章　まとめ

出土した土器から本遺跡の調査区の時期は11世紀前半～12世紀中葉の間である。また、各遺構の切り合い関係からSK1・SD1・SD2・SD3→SK2→SB1という時間的推移を見ることができる。これらの遺構は11世紀前半を中心に展開していき、柱穴P11内に埋まっていた3が12世紀まで下ることからSB1は12世紀中葉に位置づけられると思われる。

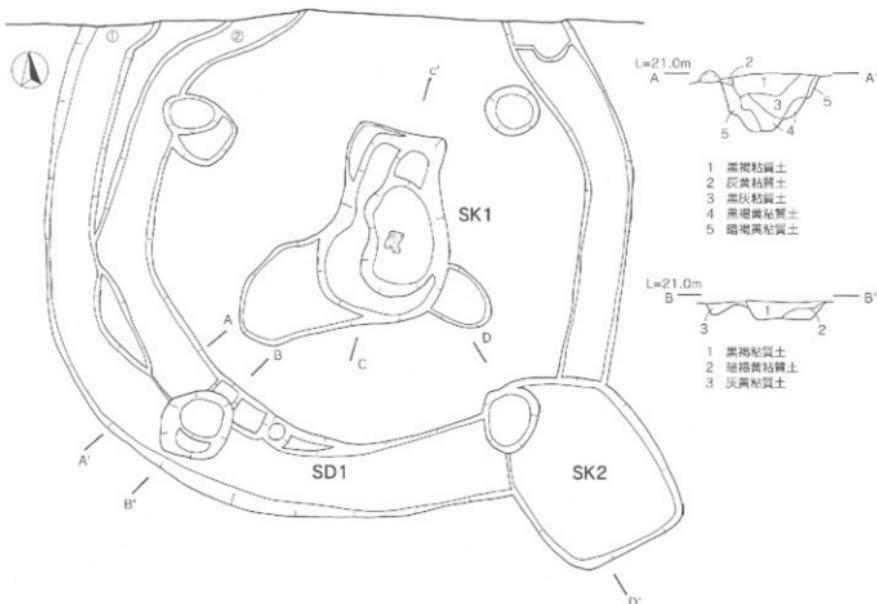
本調査区の東半分は掘立柱建物や土坑など遺構が集中するが、西半分は目立った遺構が見られないため、西方は遺跡が希薄となるようである。また、SB1は北方調査区外に延び、SD2は区画溝と考えられることから、調査区の北側に何らかの別の施設が存在する可能性をもつ。

参考文献

- 石川県立埋蔵文化財センター 「漆町遺跡Ⅰ」 1986
松任市教育委員会 「松任市三浦・幸明遺跡」 1996



第3図 SB 1 実測図 ($S=1/60$)

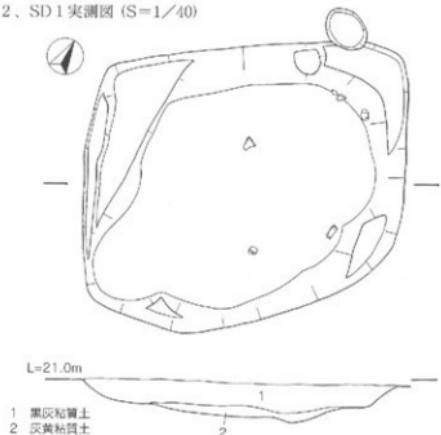


第4図 SK1、SK2、SD1実測図 (S=1/40)

1 黒褐色粘質土
2 細褐黃粘質土
3 褐黃粘質土
4 黑灰粘質土

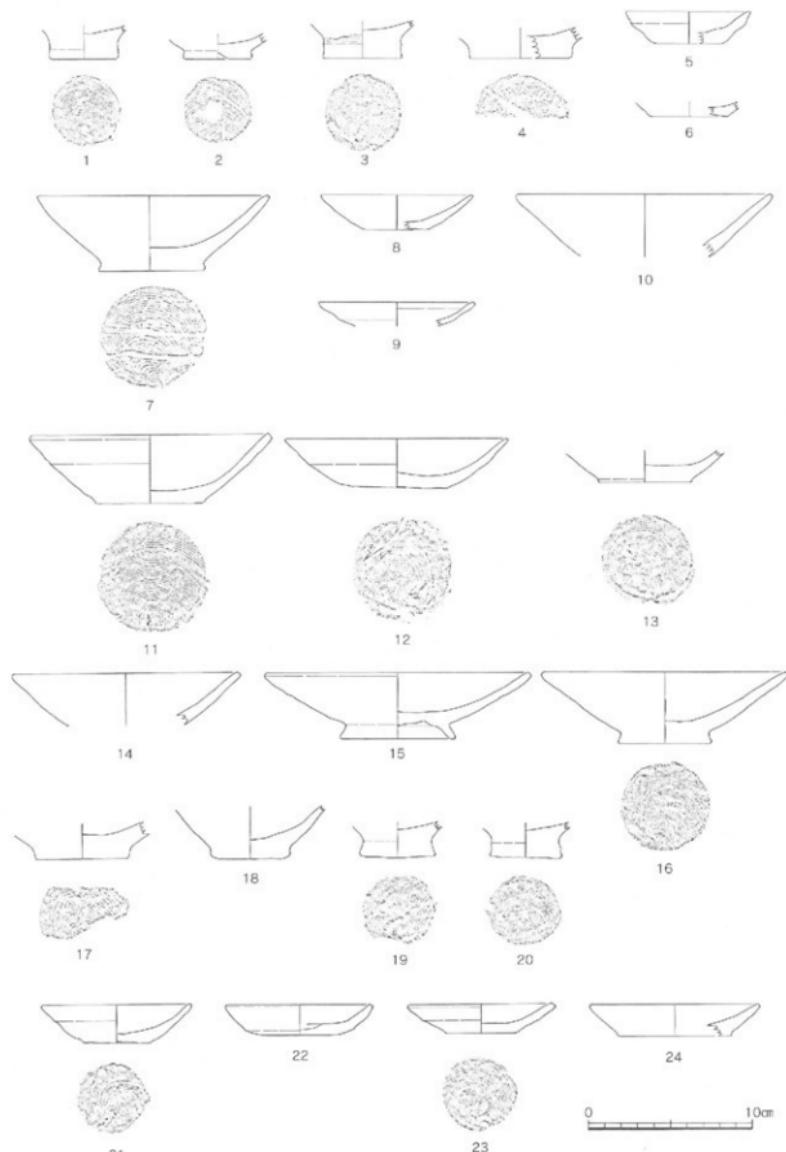


第5図 SK3実測図 (S=1/40)

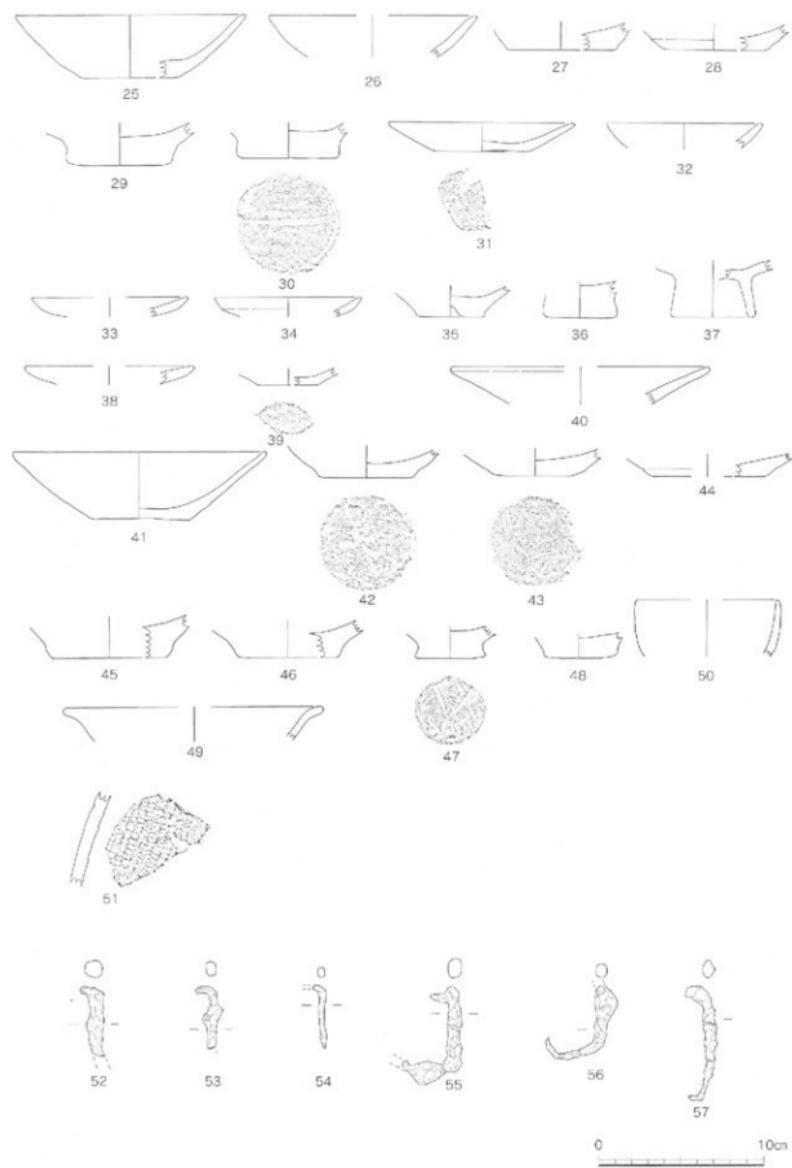


第6図 SK4実測図 (S=1/40)

0 1 2m



第7図 土器実測図 (S=1/3) 1~9 SB-1、10 SK-2、11~24 SK3



第8図 土器・陶磁器・鉄製品実測図 (S-1/3)25~37 SK-4、38~39 SD-1、40~51 包含層、52~57 SK4

上器觀察表

測物 番号	測量部位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調	形態	調 整	備 考	実測番号
1	SE1 (P8)	土器 鉢	4	4	3.6	淡粉褐色	S-0	並	内外ナデ	ビット9
2	SE1 (P11)	土器 鉢	4	4.8	2.6	粉褐色	S-0	並	内外ナデ	ビット7
3	SE1 (P11)	土器 鉢	6	6	3.6	淡粉褐色	S-1	並	内外ナデ	ビット4
4	SE1 (P13)	土器 鉢	7.6	4.4	2	淡粉褐色	S-1	並	内ナデのちナデ	ビット3
5	SE1 (P13)	土器 鉢	4.6	4.6	2	淡粉褐色	S-1	並	内ナデ	ビット5
6	SE1 (P13)	土器 鉢	13.8	6.3	4.95	粉褐色	S-0	不規	扇 不明	ビット2
7	SE1 (P14)	土器 鉢	9.2	4	2.1	淡粉褐色	S-0	並	内外ナデ	ビット1
8	SE1 (P15)	土器 鉢	9.5	-	-	淡粉褐色	S-0	並	内外ナデ	SK18 1
9	SK2	土器 鉢	15.4	-	-	茶褐色	S-1	並	内外ナデ	海綿骨針
10	SK3	土器 鉢	14.3	6.5	4.3	淡粉褐色	S~M-2	並	内外ナデ	海綿骨針 回転糸切り鉗
11	SK3	土器 鉢	13.5	6	3.1	淡粉褐色	S~L-1	不規	内外ナデ	SK25-3
12	SK3	土器 鉢	5.6	-	-	淡粉褐色	S-1	並	内ナデ	内輪耗不明 外ナデ
13	SK3	土器 鉢	13.8	-	-	茶褐色	S-0	並	内外ナデ	海綿骨針 回転糸切り鉗
14	SK3	土器 鉢	15.9	7	4.1	淡粉褐色	S-1	並	内外ナデ	SK25-14
15	SK3	土器 鉢	14.8	5.6	4.4	淡粉褐色	S-1	並	内外ナデ	海綿骨針 回転糸切り鉗
16	SK3	土器 鉢	5.6	-	-	茶褐色	S-1	不規	内外ナデ	SK25-12, 15
17	SK3	土器 鉢	4.8	-	-	粉褐色	S-1	不規	内外ナデ	海綿骨針 回転糸切り鉗
18	SK3	土器 鉢	4.6	-	-	粉褐色	S-1	不規	内外ナデ	SK25-5
19	SK3	土器 鉢	4.4	-	-	淡粉褐色	S-0	並	内外ナデ	海綿骨針 回転糸切り鉗
20	SK3	土器 鉢	9.1	4.1	2.4	淡粉褐色	S-1	並	内外ナデ	SK25-10
21	SK3	土器 鉢	8.6	5.2	1.9	茶褐色	S-1	不規	内外ナデ	海綿骨針 回転糸切り鉗
22	SK3	土器 鉢	10.2	6.8	2	淡粉褐色	M-1	並	内外ナデ	SK25-13
23	SK3	土器 鉢	13.9	5.6	3.9	淡粉褐色	S-1	不規	内外ナデ	海綿骨針 回転糸切り鉗
24	SK4	土器 鉢	12.5	-	-	淡粉褐色	S-0	並	内外ナデ	SK25-7
25	SK4	土器 鉢	6.5	-	-	淡黄褐色	S-0	不規	内外ナデ	SK25-9
26	SK4	土器 鉢	6.1	-	-	淡黄褐色	S-0	不規	内外ナデ	SK25-6
27	SK4	土器 鉢	6	-	-	淡黄褐色	S-1	並	内外ナデ	海綿骨針 回転糸切り鉗
28	SK4	土器 鉢	6	-	-	淡黄褐色	S-1	並	内外ナデ	SK20-11
29	SK4	土器 鉢	6	-	-	淡黄褐色	S-0	不規	内外ナデ	SK20-12
30	SK4	土器 鉢	11.2	5.8	2	淡茶褐色	S-0	並	内外ナデ	SK20-8
31	SK4	土器 鉢	9.4	-	-	赤褐色	S-1	並	内外ナデ	SK20-7
32	SK4	土器 鉢	-	-	-	赤褐色	S-1	良	内外ナデ	SK20-5
										SK20-1

33	SK 4	土静器	皿	9.4		淡鰭褐色	S-0	並	内外ナデ	海鷺骨付	SK20-3				
34	SK 4	土静器	皿	8.9	4.2	淡鰭褐色	S-0	並	内外ナデ	海鷺骨付	SK20-4				
35	SK 4	土静器	底部			鰭褐色	S-0	不良	内外ナデ	外底面	回転糸切り類	SK20-10			
36	SK 4	土静器	底部		4.4	淡鰭褐色	S-0	並	内外ナデ	外底面	回転糸切り類	SK20-9			
37	SK 4	土静器	底部		5.2	淡鰭褐色	S-1	並	内外ナデ	外底面	回転糸切り類	SK20-12			
38	SD 1	土静器	皿	10.2		淡茶褐色	S-1	良	内外ナデ	海鷺骨付	SD 2				
39	SD 1	土静器	底部	3.8		褐色	S-1	良	内外ナデ	赤褐色混和材	SD 1				
40	包含層	土静器	碗	15.7		淡鰭褐色	M-1	並	内外ナデ	赤褐色混和材	包 8				
41	包含層	土静器	碗	15.3	6	4.1	淡茶褐色	M-1	並	内外ナデ	外底面	回転糸切り類	包 11		
42	包含層	土静器	碗	5.9		淡鰭褐色	S-0	不良	内外ナデ	外底面	回転糸切り類	包 7			
43	包含層	土静器	底部	5.4		淡鰭褐色	S-0	不良	内外鷺毛不明	内底面	SD 1				
44	包含層	土静器	底部	6.8		淡鰭褐色	S-0	不良	内外鷺毛不明	赤褐色混和材	包 6				
45	包含層	土静器	底部		6.8	淡鰭褐色	S-0	不良	内ナデ、外ハケ	内底面	SD 1				
46	包含層	土静器	底部		6	淡鰭褐色	S-0	不良	内外ナデ	外鷺毛不明	海鷺骨付	包 2			
47	包含層	土静器	底部		4.2	淡鰭褐色	S-1	並	内外ナデ	外底面	外鷺毛不明、外ナデ	包 3			
48	包含層	土静器	碗	4.4		鰭褐色	S-0	不良	内外鷺毛不明	赤褐色混和材	包 5				
49	包含層	青磁	碗	15.6		ウツクシ色	S-0	良	内外鷺毛不明	龍泉窯	暗灰釉	包 9			
50	包含層	碗		8.6		青綠色		良							
51	包含層	深杯				淡茶褐色	S-2	並							

銅製品概要表

遺物番号	器種	大きさ (cm)	断 (cm)	重さ (g)
52	釘	(4.3)	1.5	7
53	釘	(4.8)	1.7	6
54	釘	(3.9)	0.85	2
55	釘	6.2	3.6	13
56	釘	(5.2)	3.4	7
57	釘	7	2	7

色調 外一外面
内一内面
S - 1 mm 以下
M - 1 ~ 3 mm
L - 3 mm 以上
0 - ほどんど含まず
1 - 少量含む
2 - やや多い
3 - 多い

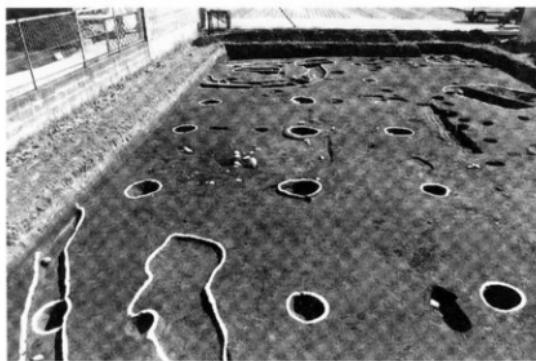
() は残存している長さ



調査区周辺風景（北西から）



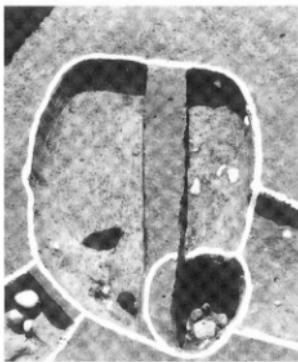
調査区全景（北西から）



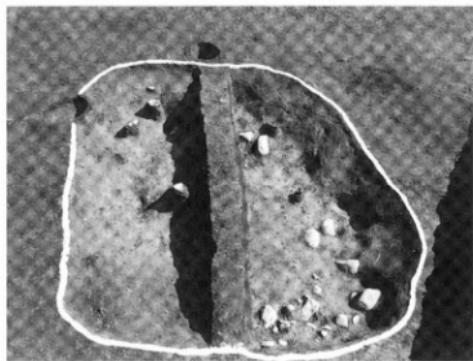
SB 1 (西から)



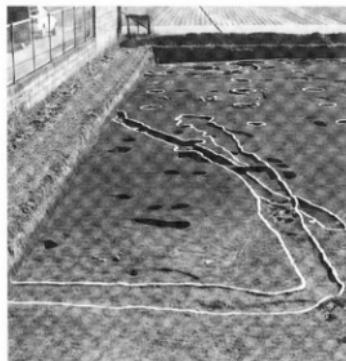
SK 1、SD 1 (南から)



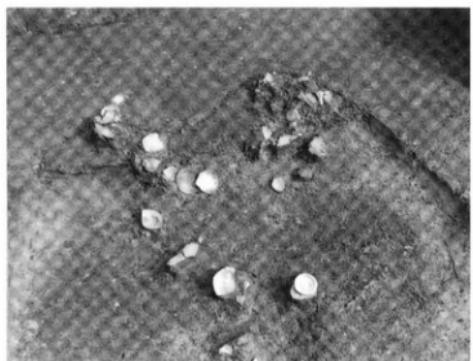
SK 2 (北西から)



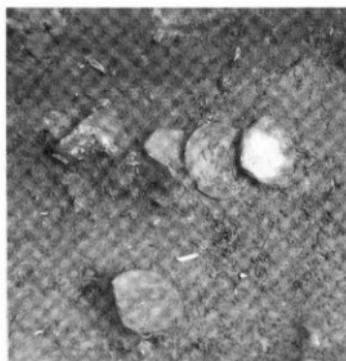
SK 4 (南西から)

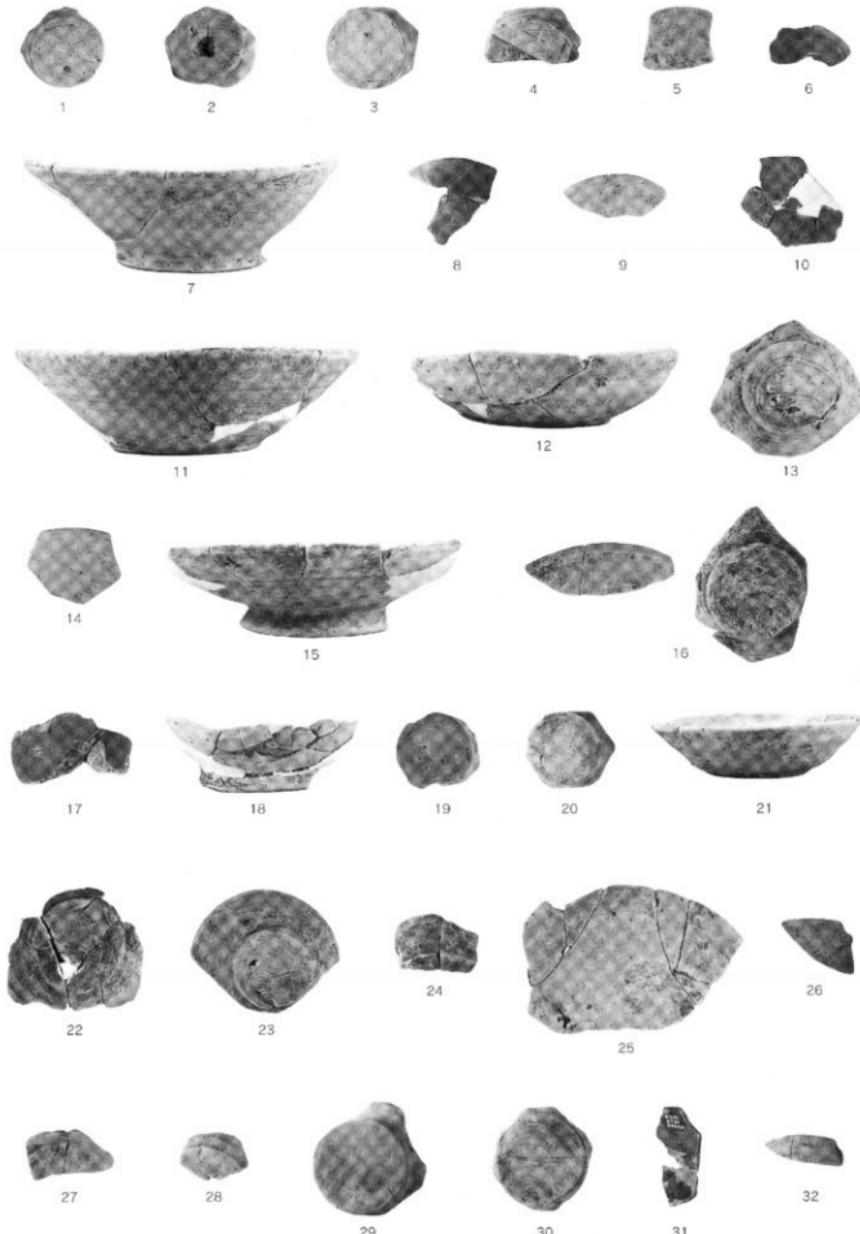


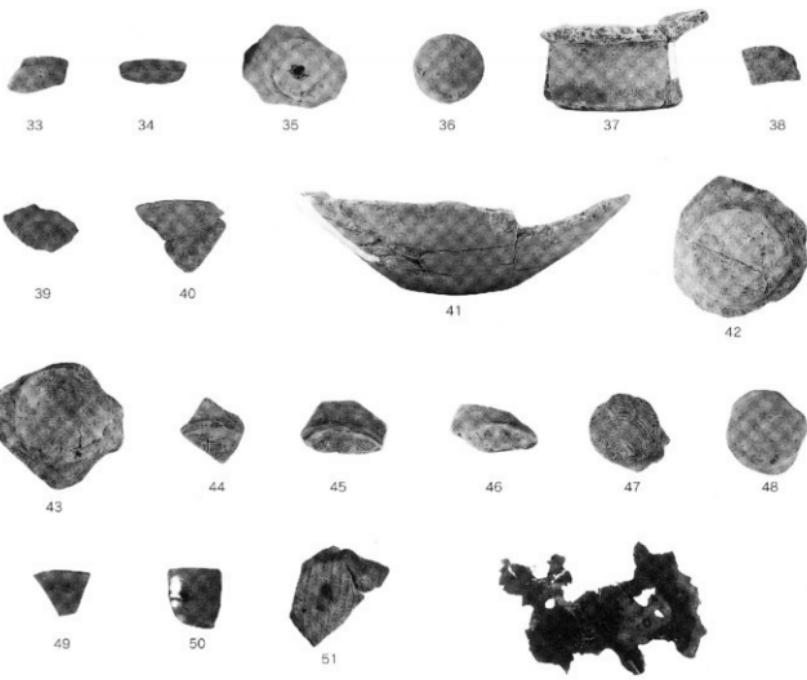
SD 2、SD 3 (西から)



SK 3 遺物出土状況 (西から)







SK1 木皮か



土器・陶磁器、鉄製品等

報告書抄録

ふりがな	おうぎがおかやぐらだいせき							
書名	扇が丘ヤグラダ遺跡							
副書名	扇が丘住吉地区圏整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	II							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	徳野 裕子 田村 昌宏							
編集機関	野々市町教育委員会							
所在地	〒921-8815 石川県石川郡野々市町本町5-4-1 TEL 076-248-8545							
発行年月日	西暦 2002年7月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
扇が丘 ヤグラダ遺跡	野々市町 扇が丘	17344		36°	136°	1992.9.21～ 1992.10.2	360m ²	集合住宅 建設
				31°	37°	1997.9.20～ 1997.11.19		
				25°	35°	1998.5.14～ 1998.9.10	3,000m ² 5,000m ²	区画整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		特記事項			
扇が丘 ヤグラダ遺跡	集落跡	古代	上杭	2基(1992)	土師器			
			溝	3条(1992)	土師器 須恵器			
			堅穴建物跡	1棟				
	中世	掘立柱建物跡	1棟	中世土師器				
		掘立柱建物跡	24棟	中世陶磁器				
	近世	溝	近世陶磁器					

扇が丘住吉地区圏整理事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書II

扇が丘ヤグラダ遺跡

発行日 平成14年7月31日

発行者 野々市町教育委員会
〒921-8815
石川県石川郡野々市町本町5-4-1

印刷商 高桑美術印刷株式会社



